川柳塔

昭和四十一年 一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年 九月二十五日 印刷
昭和四十七年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五四五号

No. 545

47年度二賞発表

十月号

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社

大　阪　支　店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電　話（779）1690～2番

蓬莱商品の目印

551

豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば　蓬莱　TEL(641)0551～2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

王座はきびしい執念の日章旗
振り出しに戻って表情崩さない
休憩となればガイドの京訛り
お疑いはご尤もながらと嘘をつき
大人の狡さ落ち目と気付かぬ不倖

中島生々庵

敬老の日

敬老の日を今年も迎えた。少しでも生きる喜びを感じて貰うために温い手をさしのべて老人を大切にする事は意義深く尊いものである。大阪市内だけで五千人近く全国では三十四万人の寝たきり老人が居られると聞くと、私のすぐ身近かに「恍惚の人」の姿が迫って来るような思いがする。

先日新聞紙上で作家の田辺聖子さんの言葉を読んだ。「長老とか元老とかいうものは、この世の中のはげしい有為転変、栄枯盛衰のことわりを、実際に見とどけるという事が長生きのたのしみだ」とあった。こうした考え方に立つと長生きの意味の巾も大変拡がるわけだと興味深く読んだ次第であるが、所詮人生は邂逅と別離の軌跡と言われている通り、たとえ苦しくとも楽しくとも、そんな我が儘は言わずに、しっかり現実を見つめながら、そして心静かに遠い遥かな一つの灯を見失わぬように、少しでも長く人生の旅路を続けてゆくのが、又続けねばならぬのが私達に与えられた宿命であると観ずべきではないだろうか。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い　（路郎）

私の句

駅長の挙手で特急通過する

大江秋月

川柳塔十月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

敬老の日……中島生々庵…（1）
演技心覚え……正本水客…（2）
川傍柳初篇研究…（百十一）……前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唖三味・丸博美・藤井和雄十府・岡田甫
起してうけてひねつて結ぶ……東野大八…（40）
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
近作柳樽……菊沢小松園選…（30）
一分間の柳論……中川晃男…（57）高杉鬼遊…（59）
秀句鑑賞…（同人吟）……浜田久米雄…（42）
二賞中間発表…（近作柳樽）……正本水客…（43）
川柳五十三次（二十四）……冨士野鞍馬…（44）

演技心覚え

正本水客

先日、本箱の整理をしていたら古い紙切れが出てきた。「演技心覚え」の表題で中村翫右衛門の名がある。

私の好きな劇団の一つに前進座があるが、盟友河原崎長十郎が去るまで二本の柱として同座を支えてきた人である。演技と熱は云うまでもないが、弁舌のたつという点でこの人の右に出る俳優はないであろうと思う。

「心覚え」は同優が芝居道における自分の戒めに書いたものであると思うが、川柳する心構えと全く同じであると驚きにも似たものを感じた。九カ条からなっている。

一、人の真似をするな、拙くとも自ら創り出せ（再演芸術である歌舞伎の世界に新風を吹き込み、創作的意欲を次々と見せて呉れることは嬉しい。人真似を脱し切れないマンネリ川柳よ、嗚呼）

一、俳優は、いつもこれでよいという満足を感じずに一生を過ごすものだ（一句を残すために私達も生涯をかける）

一、俳優は絶対の確信と限りない反省と、

近詠……諸家……(39)
芙美子抄……高鷲亜鈍……(25)
47年度路郎賞・川柳塔賞発表……(21)
創刊号あれこれ……不二田一三夫……(45)
私のメモ……吉田水車……(46)
愉しき哉高野山……谷垣史好……(46)
小松川柳大会出席の記……橘高薫風……(51)
喫茶店が勉強部屋……小谷葉子……(53)
雅号ぶっちゃけばなし……浜野奇童……(61)
初歩教室……本田恵二朗……(50)
大萬川柳「糸」……川村好郎選……(52)
柳界展望……(薫風)……(54)
本社九月句会……(庸佑)……(56)
各地柳壇……(文秋)……(60)
一路集「急所」……越智一水選……(48)
「表向き」……田中蛙眠子選……(48)
「手ぐすね」……小川恒明選……(49)
編集後記……(一三夫・葉子)……(65)

座右の句

ひとりだけ財布を持つて来た水着　（白柳）

私の句

好きと云う心を肩の手が語り

林瑞枝

この裏表を絶えず忘れてはならない（これが自分の句だという自信と、そして絶えざる自己批判と、）

一、巧く演ろうと思うな、ただ全力をつくせ（巧い句を作る人は多い、命ある句をこそ）

一、昨日よくできても昨日のように演ろうと思うな、今日は今日の気持で演れ（昔の自分の句を見て、案外いい句を作っていたんだなと自分で感心することがあるが、裏を返せば余り進歩していないと云うことである）

一、批評は大切なものだが、善悪を見極めずに、あまりに批評に動かされては自分を見失うことになる（真面目な批評には謙虚に耳を傾けるべきは当然であるが、批評のための批評など気にすることはない）

一、稽古中は憶病に、舞台へ出たら自信を持て（芭蕉の云う言葉を正すこと、納得のゆくまで推敲を重ねて自信を持って句を発表する。いったん世に発表したものは、もう個人のものではない）

一、行詰れ、打破れ！　行詰れ!!　そして打破れ（惰性で句を作っていて、行詰りを感じることの出来ないのが一番おそろしい）

西尾栞選

倉敷市　水粉千翁

行きつ戻りつ瞼の裏の涯しなく
ふるさとへかならず埋める白い骨
塗りつぶす墨のこころの香は失せず
カンナ炎ゆおんなの径の昏れるとも
肩を組む一対一の顔ばかり
蚊が背を刺して両手がもめている

藤井寺市　西いわを

莫蓙に寝て融通無碍を識るのなり
夏座敷魚の額を泳がせる
芥粒のいのち大切に支えとり
此処だけの話に興が乗って来ず
左手は爪も切れないもどかしさ
追い付いてみよと蜥蜴に嬲られる

松原市　谷垣史好

街道に一つ灯がある何でも屋
秋の酒恋しがんもどきが煮える
有難うて有難うて酔うより他はなし
暑がりと寒がり夫婦だから暮らせ
さざ波にも消えるさ僕の足跡は

墓参帰省

母の背のまるさお墓へのぼる道

島根県　堀江正朗

嬉しい日閉じた瞼に詩が湧く
賑やかな娘がいて灯りまだ消えず
見えたなら花と対話も出来ように
親切が仇になる日もまた夫婦
子に歩巾合わす努力をしています
僕の負けはっきり知った母の愛

竹原市　山内静水

気の毒な貴男は嘘のつけぬ方
一旦停車お地蔵さんも確認す

すぐ力んで話す貴方で誤解され
お姑さん白髪があるわと座らされ
望まれて嫁き子供に恵まれず
隣りまで行ってくるぞと出たっ切り

堺市　高橋　千万子

夫ガンにて死亡

疑うたその一瞬が死につづき
手おくれと云わず何んでもたべなさい
人生の終着駅かこのベッド
もう十年生きててほしい巻線香
後三月聞いたそれから秒をよむ

松江市　岡崎　祥月

しみじみと心にしみる雨の音
先祖代々墓石を洗う六十路の手
夏にくし水都をこわす傷の跡
水見れば水に恐怖の色が湧く
神様の試練をかるく受けて立つ

平田市　久家　代仕男

豪雨禍

泥水に陸の孤島の松屋敷
水びたし世にも哀れに牛が鳴く
柳友の見舞はるばるゴムボート
玄関へポンポン船で水見舞
大臣の視察は水が引いてから

松江市　吉岡　遥児

―八十年ぶりの大洪水見舞う二句―

ただ無策降るにまかせるだけの湖都
炊き出しを運ぶ国道という運河
夜明けのプロローグいま新聞を入れた音
これも災難チャックに雷さんが落ち
金で済む話と軽く云うけれど

八尾市　香川　酔々

かくれんぼ鬼のひたいが蚊にくわれ
お祭りの晩から金魚仲間ふえ
地下街でねずみも生きる換気筒
みやこぶり見せる炎の大文字
ケーブルで軽く攻略千早城

大阪市　正本　水客

水に音なし四季咲きのカキツバタ
セキレイの巣があり話せば老婆よく話し
ひと品ずつ時間をかけて料理出る
ボタンの緋　にはい酢の箸染まりそう
湖の人嫌い霧のベールを脱ごとせず

鳥取市　河村　日満

人災というを罹災者聞きあきる
集中豪雨よついでだ公害も押し流せ
水害の壁ぼろぼろと手にこぼれ
ヘリコプターから松江は海の中の街
水攻めのさらに試練の雨つづく

八尾市　高杉　鬼遊

夏帯をかばいて左大文字
大の字に炎えて仏の去り難く
プロレスを見るとき父の眼が生きる
生きてゆく勤めに身体までこわし
料亭で大根の値を言う男

兵庫県　遠山可住

初対面期待していた顔でなし
誰がなんと言おうと票になるチャンス
どないしてても喰える過密の中の知恵
虹が出てもう一息の腰を上げ
金のある余裕しばらくリードさせ

門真市　福島鉄児

畳替えして結納の朝を掃く
女の執念に観念の眼をつむり
幸せは迎えに行ける傘を持ち
灯を消して幸せな夜の幕が開き
蛙鳴くここが大阪市の空間

倉敷市　本田恵二朗

警察署スピーチ教室講師をつとめて

スピーチの稽古刑事が照れている
其の次の言葉が出ないほどあがり
三分間のスピーチ額に汗をかき
警察に笑いが湧いた昼下り
恵二朗節でスピーチ講評し

大阪市　大坂形水

保守票の企み土地を騰げ株を騰げ
公害を嘆く大臣などいない
晩の街歩ける日本有難い
食餌療法馬鹿らしなってから治り
電話では断わられそう手紙書く

豊中市　戸田古方

巡礼行

仏縁に近づく旅に蓮が咲く
ステテコの院主に縁起きかされる
ともかくもあなたまかせの宿を得て
雷鳴や寺に泊った夜のこと
巡礼がひっそり帰る新幹線

大阪市　太田良子

ここいらで本音はき度く酌ぎかえし
凝ってつけた名前だから振仮名が要り
正装で出てもパチンコ屋へは寄り
病院に慣れてしもうて病みつづけ
好色の髭がそろそろ白うなり

富田林市　岩田美代

縞柄が生きて勝気のこぼれそう
絆切る鋏もすでにさびて居る
ふり上げた蟹の鋏がまだ青し
敵のない男の歩巾小さすぎ
お悔みを言う標準語がむつかしい

岸和田市　高橋操子

子の為に耐えてよかった日を送る
その人を信じうわさも胸にとめ
いちびる者あるから政治やって行け
遠花火昔の恋の美しさ
阿呆になる時間此の世はつらきもの

大阪市　山川阿茶

雑用にひたり頭も俗化する
友情もソロバンに手がふれるまで
眼をむいた不動へゆらぐ紅芙蓉
あつかまし健保で看護婦くどきに来
車さえあればと男自信もち

大阪市　河股緑水

日曜日誰も私を起さない
水茶屋に来てまで老父かしこまり
来客が女と聞いて会う気なり
金貸しの暑中見舞いに恐れ入り

亡妻

若き日のままで亡妻生きている

倉敷市　野田素身郎

二人連れ子連れ僕だけは一人
そういえばそんな素振りもあった仲
六法全書老眼鏡の度が合わぬ
自分の悪口を聞くともなしに聞く酒場
精薄の友も中年太りにて

米子市　八木千代

金魚ひるがえる童子の眼のままに
鈴虫の貰われて行く先を撰り
この辻も千人針の記憶持つ
クラス会ひとりいくさの影と来る
付添の過去が気になる日のベッド

岡山市　浜田久米雄

アメリカの広さが皆の腑に落ちず
またしても土産話を所望され
いつの間に蚊柱どこへ行ったやら
入れ歯またトマトの種と妥協せず
老眼鏡人を殺した記事を読む

大阪市　西出一栄

夏バテをいとうて鰻の日が続き
難聴の横に振る首縦にふり
鈴虫へ耳近寄せて鳴き止まれ
言わずとも齢に合わして結うてくれ
みだれ髪当世は男のみだれ髪

新宮市　川上大輪

馬鹿でない証拠に嘘をついてやる
山越えたところで夕陽見失ない
首輪かも知れぬネクタイ締めて出る
遅れまいと影も必死でついて来る
ゆっくりと廻りたい日もある地球

大阪市　金井文秋

団交へいんぎん無礼らちあかず

ウエストに自信があってへそを出し
ばあちゃんの愛情嫁の気に入らず
ありがたい話で埋める宗教誌
丹精に答え大輪咲いてくれ

青森市　工藤甲吉

年金もろくろく呉れず長寿国
何をしてもらおうという一票か
金将も歩になっている定年後
君は昭和ワシは明治のチンプンカン
亡びゆくものの淋しさお馬の目

米子市　林瑞枝

夢を呼ぶ二度ないチャンスへ背伸びする
通行人の助言嬉しい松の色
したいようにさせようと老母はいたわられ
外づらの良い苦虫の背を流す
放とけば治る機械を医者通い

香川県　三井酔夢

舅十三回忌に（三句）

母系家族で長男ひとりほっとかれ
長男の嫁の重みに腰をすえ
尽すだけつくしお世辞の言えぬ嫁
小姑のそれぞれの愚痴聞いてあげ
一線を引き裏方でいる平和

東大阪市　宮西弥生

ここまでの線引きとめるのも女
移り香の花と知りても蝶の媚び
寝不足の今日派手なドレス着る
さまよいて貝は渚の石に媚び
酌ぎこぼす女秘密脱ぎかける

宝塚市　傍島静馬

お若いとき持てたでしょうが気に入らず
赤ン坊より先にうとうとする添乳
踊り子の脚をいたわるパンタロン
味噌汁のにおいが残っていたキッス
仁術と思えどアタマにくる患者

出雲市　尼緑之助

まんがの一とつがい真夏の大通り
老醜のおなら寂としてたのし
先頭に立って我れこそ原水禁
公害をまいて　もやしのよな文化
ビニールを張って夢追う蘭　万年青

倉敷市　小幡里風

上司にも部下にもけむたい僕の位置
父と手をつなぎも一度歩きたい
割愛と云うなのもとに葬むられ
早速ですがと難問持ってくる
夏バテという事にしたある苦悩

神戸市　小浜牧人

ふるさとを瞼に夏の甲子園
咳払いしても素気ない自動扉

浴衣着た裾の捌きも女子選手
赤と青夏の若さを画布へ塗る
盆踊り恋の手振りも輪にはいり

大阪市　有信　新之助

限られた時間にはじめて炎えた恋
即死という字にも馴れ数に馴れ
祭囃しへベルトのないズボン
五尺の身屑石けんで洗いあげ
知らぬまに隣りの県を往く家並み

倉敷市　小野克枝

酒の味知らぬ夫婦の読む童話
ふと神を思う峠のけつまずき
惜しまれて行く栄転の荷の重さ
方便の嘘が苦しい子の視線
案内状義理で出席してくれる

高槻市　若柳潮花

暮れて去ぬふたりへ麦の穂の匂い
誰に逢う雀か朝の羽づくろい
稽古場を出たら男を取り戻し
雲燃えて水へ影置く竹生島
名水園湖水の波が洗う砂

大阪市　本多柳志

自信なのかやけくそなのかよく眠り
かかわりのねえ人へつき出す署名簿
マダムからネーム読まれていた迂闊
忘れたし忘れたくなし原爆忌
議決した拍手にひる寝起される

宇部市　石川侃流洞

極楽は姑の肩を揉む手にも
故郷の墳墓へ車窓から会釈
愛称へ虫のいどころグッと来る
明るさはチータに負けず縁がなし

平家一門の墓

七盛塚哀史がつづく苔の色

大阪市　神谷凡九郎

斗病記生命と今日も話しあう
鏡の素直さそれが憎くいにくうーい女です
〃好き〃〃愛いしてるワ〃そんな言葉が離婚さす
云うならば空気二十五年の二人です
振り切って見てもみても自分が離れない

尼崎市　黒川紫香

負け嫌いそれからずっと無口なり
屋上で見ればスモッグもない入り陽
信号をおんなじように犬も待ち
改札が見向きもくれぬ定期券
故郷はいいなと思う露の径

竹原市　小島蘭幸

一番列車に飛び乗ってゆく義理があり
生活のリズムを夜におく若さ
決心の固さはひとに言うておく

セールスマン一番先に犬が馴れ
仲直りどないなってるのと他人

和歌山市　野村太茂津

切り札を匿す野心を扇子閉じ
墓に水掛けて戦友の汗と血よ
蒸し風呂の夏はビルマの友想い
ふれ合った心爆音が消して逝き
腑甲斐ない己れ嘘の世に生きてあり

守口市　村田瓢太

北海道の旅

しばし神になったつもりで下界見る
アイヌ哀し観光資源となって生き
蟹族が夏の北海道を横行す
仔熊さえ観光客へは愛想よし
一刀彫りの熊にもあった出来不出来

大阪市　中川滋雀

帰省（一句）

さらさらと小川は過去へさかのぼり
お隣りへ来た中元に判をつき
父と娘の対話をつなぐビール抜く
夾竹桃夏をけなげに訳う色
知らなんだでは済まぬ香奠ことずかり

倉吉市　奥谷弘朗

なり歩にも成れず定年来てしまい
蟬時雨伐木班は昼寝中
シンデレラみんななる気の幼稚園

北陸を旅して（二句）

永平寺さすがに威厳を感じたり
来て見れば安宅の関も国有林

大阪市　川口弘生

小心の証拠のように胃潰瘍
一仕事するように赤ちゃん欠伸する
人生が減って行くように歯が缺ける
オーと声かけたら若い娘と一緒
留守番に隣りの犬を頼りにし

松江市　中川晃男

精霊は二泊三日でもうお発ち
尾行する距離は縮めぬエスカレーター
心の眼どころか肉眼でも見えず
事務机白髪の方が叱られて
霞喰う仙人もスモッグで食当たり

岸和田市　葛城伊三郎

お中元粗略な礼を背なで聞き
冷房車降りるに惜しい駅に着き
へべれけもやっぱり我が家の方を向き
教育ママにしてはそれ程でもない子
西瓜割る音に仮病が起きて来る

新宮市　大矢十郎

当選の人に階段降りる巾
常連の誰も決めない座が決り

ご近所の寝巻も見えた夜の火事
すげ替えにいとやわらかき首を持ち
腕くらべ車くらべと抜いてゆく

岡山県　大森　娯句楽

蜜蜂に咲きたての花くすぐられ
はしやいで誘われた海俄雨
古稀過ぎて筆の運びの腰が折れ

吉備路「国分寺」にて

五重の塔方位知らせる十二支を彫り
探ぐられる肚とも知らぬ口軽さ

呉市　槙田英詩

栄枯盛衰白壁無言の詩を綴る
口笛を鳴らして卑怯者が逃げ
満たされぬ男へ夜の蝶が群れ
コネ要らぬ自信ライバル慌てさせ
倦怠期魔女めく妻になりおうせ

京都市　都倉求芽

死のレジャーそれでも一億夏に酔い
金網の要らぬものまで掬い上げ

唐桑・巨釜

ただ鳴るは海その中に岩と僕

国道一四五号線

日が暮れて停ることなしバスの風

中尊寺

杉の雨義経のまぼろしと写す

棘ある日捨てたらと思う花うばら
惜しみなく愛はうばえと花キャベツ
一ト言を呑みこむときに口かわき
風の持てくるたよりこのままたぐろうか
旱ばつの陽はきりもみして刺さり

島根県　小砂白汀

信じてる明日に不安な脈が打ち
人が皆馬鹿に見えたは儲けた日
筋道をたてても曲った臍なれば
貧乏を誇張貸せとは言わないに
当てにせず待つとは憎い皮肉とも

岡山県　池田古心

福祉施設見学（二句）

身障者無言真剣作業中
盆踊り恍惚の顔太鼓うつ
誕生日今年はこんなすごし方
東の間のおしゃべりさん蟬哀れ
スモッグもいろいろあるを知らされる

東京都　増田次章

夕顔へチラリと覗かす女戸主
足に来た年へお灸すえられる
毒だみは花の白さへふれさせず
健忘性暑さのせいにして逃げる
打ち水へ静かさを呼ぶ奈良格子

桜井市　岩本雀踊子

夏枯れの街ダンプ車の音せわし
ペン置いた手にたわむれる池の鯉
店番の閑へ孫の守もってくる
ささやかな避暑ふる里の風の中
見送りの途中二人へ気をきかし

島根県　藤井明朗

ヒロシマの鐘炎天の音を消す
増産に踏み切ってからブーム去り
趣味のいい話をママがかき乱す
ひとごとのように五十の坂を越え
お人好し過ぎた自嘲のコップ酒

和歌山市　垂井葵水

へんな子守唄やと赤ん坊が笑う
祖母ちゃんとわかっているのか補乳瓶
顔知らぬ隣の風鈴よく響く
満月に対座して待つ鈍行車
涼風を駅へ残して特急車

大阪市　宮尾あいき

風鈴の風がページを繰りにくる
鍋を磨いてささやかな誇りとし
夏休み堪能したは母ばかり
本好きにさせたい母も本を読み
冷静に話し合うても反抗期

大阪市　小出智子

金剛山登拝二〇〇回
二百回小石も草も顔なじみ
もう駄目か駄目かとリュック気を使い
又来たか冷たい水が呼んで呉れ
よくやって呉れたと足を撫でる風
御機嫌が悪い日もある金剛山

大阪市　室谷徹舟

現在の性へ歓喜天首ひねる
後へも廻って見たい歓喜天
豪雨禍へ台風とどめさして去に
降らんでも降っても困る細い国

実兄死亡
これからの余生だったに急ぎ逝く

鳥取県　清水一保

せち辛さ逃れる如くに海が混み
どう皆が貯めたか次々建ち並び
昆虫の行末よりも人の危機
あの時も蟬が鳴いてた炎天下

田中内閣発足
東大が何さと総理を例に挙げ

富田林市　板尾岳人

当ずっぽ云うても父は聞いてくれ
男の子女の子それそれなりの話
出来過ぎの女のなんと味気なさ
人間のまるみは昨日今日明日

大阪市　児島与呂志

待ち兼ねたとも云えないまま義理が座し

倉敷市　谷井扇水

孫連れて行くはじめてのクラス会
弁解の口添えをする友が居る
一歩だけ譲って若いナアと思い
予想からそれて盗聴器を外し
耳打ちへ味方の顔という笑い

松江市　柳楽鶴丸

辛いけどやっぱり祝福致します
平々凡々と生きて人生の不感症
帯といてから心の帯がとけ
人間らしい人間とはどんな人間だ
何か叫びたい夕陽が燃えている

大田市　藤田軒太楼

背景がいいので結んだ妥協策
駈引きの達者守勢と心得る
挨拶もそこそこ孫を抱きとられ
店番が客に値段を教えられ
客筋を女将一目で見抜いてる

島根県　大森孝華

慕いよる心の鏡振り切れず
失意の日風の姿にさからわず
微笑に溶けて涙となる振子
酒の味社長代理へ気をゆるし
本願の教えわからぬ念珠抱く

大阪市　橋高薫風

残酷な声　睡蓮の眠れるに
父と子の相似の頤の故郷の橋
大文字　恋のはじめのごとく点く
大文字　はや消えかかる第二画
大文字聞えぬ音に見えぬ影

大阪市　不二田一三夫

皇后さまも女　ハンドバッグ提げ
履歴書用紙に「明治」すでになし
山での恋は雷雨の夜というパターン

寄　席

老いてますますとは芸人の世界
テレビ以外の芸人はみな忘れられ

高槻市　福田丁路

貧困な政治に馴れて丸う寝る
み仏のいます紅葉の山険し
暁のお百度犬に咎められ

釈伽堂倒壊

山崩れ仏も苦難ともにされ

岩国市　弘津柳慶

今やっと謎が解けて悔まれる
瞑想も出来ぬ国道筋の家
故郷へ帰れば施餓鬼の御案内
機嫌悪い娘へ妻も無口なり

大阪市　江城修史

華麗なる変身髪と爪を染め
斗病の昼寝と他人は見てくれず
半生をゲートル巻かせた世を憎み
うたたねの妻に暮しの陰を見る

名古屋市　吉田水車

路郎忌

雲の峰また近くにも遠くにも
容子していては喰えない西爪かな
黙々とあのみちこのみち朝の道
柳翁忌わが家のぶどうつつがなし

岡山県　直原七面山

浮気がばれて家裁のお世話
妥協は望めぬ二人の片意地
腹の子供へ許す結婚
和解のビールを黙ってゴクリ

神戸市　仲どんたく

インタビュー恩を返した息の音
若人を縫うてプールの観海流
子の嫁を捜す眼痴漢と云うなかれ
エスカレーター暫し襟足楽しまん

呉市　林野甦光

避難場所決めて台風待っており
二枚目に見られて女けつまずき
食べ過ぎた魔女に妖気が出し切れず
貧乏の底が夏陽に透いて見え

姫路市　隠岐不酔

余まされた事が分からぬ年の所為
六時間置にと看護婦念を押し
乱筆を許せと書道教師から
手に汗を握ったところでつづくと出

大阪市　天正千梢

恐山お祭参拝

重罪地獄へ背筋つめとなり
下北弁でいたこの宿命
人さまの霊呼び出して四百円
最果てのわびしさ風もささやいて

愛媛県　渡辺暁童

食い物になるおっさんと見てとられ
蟻の群赤旗持ちに似たのも居
さらりさらりと物忘れする
厨のくらさおしのけて鯛

松江市　小林孤呂二

水害の明けて小猫に居すわられ
みんなから好かれている片笑くぼ
陽のおちて静けさもどす城下町
子にすれば父のお酒に思慮がなし

岡山県　浜野奇童

温泉のやがて夫婦にして帰し
またあした逢う約束の立ち話
十代の恋婦人科へ泣きに来る

皆さんのご意見ですと無理なこと　大阪市　福井野迷路

社会党へ（一句）

右こぶし挙げて左派とはややこしい

海舟作へ（一句）

無事澄然有事軌然飯は別

追う人と追われる蠅の智恵互角

ごきぶりに振り廻されて惨敗す　堺市　吉岡青香

負け犬は去ったりビール栓を抜き

農協の知恵実らせた名産品

ウェートレス聞えぬ振りもいたにつき

新日本地図に期待が多過ぎる　広島県　高橋鬼焼

くずすまい積み木の音が悲しすぎ

街灯の雨へ略図を読みかえし

ヨチヨチの歩巾を八ミリ追かける

二人の知恵結論へふみきれず　姫路市　村上春巳

竜ケ洞神代のままの壺の位置

野良犬も居る闘犬の町の朝

ともすれば若さが戻るハイウェイ

もの言えば赤くなるのも今の内　京都市　松川杜的

八月十五日（二句）

終戦記念日静かなお茶を汲む

七彩の雲から聞えて来る軍歌

迷信はともかく朱竹の軸もかけ

胸張って胸張ってと夾竹挑にささやかれ　下関市　志賀木石

目の保養どうぞとホットパンツ行く

久々の帰省で腹を酷使する

他を殺すことを知らない羊の瞳

ハンドルよ何んでそんなに先急ぐ　愛媛県　村上旭童

地下足袋を通して舗装道路夏

遂に雲つかんだらしく新車で来

子沢山日本中から帰って来

筆談のやたらにものをききたがり　大阪市　黒田真砂

追憶のベールをめくる音幽か

一線を引けば相手も向きを変え

明日の幸信じて今日の仕舞風呂

変身をする気眉毛も細くそり　松江市　恒松町紅

脱都会山川草木荒される

病院へ行くにも決意いる男

洪水のない大空の天の川

ともかくも社長と呼んでおけば無事　東大阪市　竹中肖二

廻り道でも冷房の地下を抜け
ともすれば余生に煩悩つきまとい
三人の小さい孫を評価する
台風の去るが如くに孫帰える

東大阪市　竹中綾女

カンナ炎え残りの暑さ呕歌する
護国神社深閑として我一人
男根の木型の山に友を呼ぶ
淡島の絵馬堂の奥ちらと見る
プールから和歌浦の海眺めやる

鳥取県　森田布堂

この露路を抜ければ質屋顔なじみ
愛嬌と若さが無駄をまた買わせ
よく飲んだことがまた出た三回忌
神官が見馴れたアベック結びつけ

岡山県　横山一声

当ってくだけたくない恋であり
折伏をするのに大きな嘘をつき
新築を賞めてお金のことにふれ
百姓も泥によごれず米がとれ

大阪市　河野君子

宝石に向い女の斗志燃ゆ
信じ合う心坂道を意識して
台所磨いて平和を信じてる
子がふかす紫煙にふっと距離を置く

兵庫県　大江秋月

平和そうな灯が次々とつく団地
ふんどし一枚で応対できる友が来る
遊ぶとこと決めて大学三期生
夕立が来ず風だけのおすそ分け

大阪市　飛田好一

飲み助で顔売れてます平社員
忙がしい中にこまめな昼寝ぐせ
ぶっちゃけた話が腹の底見せず
変身へ手間ひまいらぬ酒がさせ

竹原市　森井菁居

悪夢ふり払えず酔うただけのこと
軽蔑ですむのも他人様の距離
男の孤酒徒の汚名を良しとする
愛憎の愛をひたすら信じ切り

倉敷市　松下梁水

左遷だと知りつつ祝詞まだつづき
主義捨ててからの浮世へ広う住み
ある敵意お世辞の中に秘めている
一徹を見放す人と惚れる人

岡山市　川端柳子

ぼうふらよここにも生の歓喜あり
無いことにするお話に手間が入り
そんな馬鹿な思う抜け道あって無事
ここで今冷たい人でぐっと耐え

八尾市　飯田悦郎

抵抗が出来て乾いてゆく心
口笛を吹いて失恋あきらめる
職場では地位が異なる共稼ぎ
貧乏に勝てとは無情の第三者

大阪市　河井庸佑

高野山にて

千年の歴史知ってる樹々並ぶ
高野槙先祖の土産に買うてくる
朱を入れた墓石もまじる奥之院
老若男女ぞろぞろ続く奥之院

大阪市　西川誓二

如是我聞と経を写せば仏国土
ああ無情値札のゼロが多過ぎる
いとおしい人の裏見た不仕合せ

岡山の旅

すどぼっこう大阪が近い新幹線

岡山県　出原敬一

診察にゆくのに乳房ふくらませ
悪友と酔うて妻への叛旗振る
裏切ったその手で妻の肩を揉む
わが青春賭けた女房のこの寝相

鳥取県　鈴木村諷子

駅長の帽子がリンとした威厳
秒針で動く列車が滑り出し
口動く老婆の顔に倖せの
キャンプ村アダムとイブで飯を炊く

笠岡市　松本忠三

出稼ぎの村へ豪雨の容赦なく
朝刊を見れば逆転されており
口出しをせぬと言うたが二、三分
終いまで聞けと始めから叱言

倉敷市　竹内翁童

やり場の無い怒りが始めた大そうじ
名産のソバ粉外国から買う汚染
ジンクスの左足から科学者家を出る
友情を土産にタラップふむ別れ

倉敷市　藤井春日

この上は吾子に夢を託すのみ
思い出の中に生きている信女
借金借金恵比須大黒床で笑み
恋知る瞳雨降る中の紫陽花か

大阪市　今西章雅

ガス風呂が沸き過ぎていた子の新居
いい風がはいるが網戸のいる新居

暑中休暇の小学校にて（二句）

騒音測定空教室の窓をあけ
塩素測定学童嬉々と水しぶき

西宮市　島居百酒

一生の不作の妻に掌を合せ
今日の身は水天一髪だけの誤差
方言でもてなす地酒に心溶け
悠々と趣味に活きると敗者の弁

東大阪市　斉藤三十四

胸襟を開いて悪友集りぬ
朝寝坊ですよと嫁に引継がれ
皆んな留守蠅に合掌されている
無職だがお祭りだけは忙がしい

小松市　馬場魚山

羽ばたいた心算が白い眼で見られ
未亡人男心を外らすコツ
絶え抜いた孤独は豪酒とも呼ばれ
すぐ治るからと宗教から誘い

出雲市　原独仙

父ちゃんの技術売る服油服
ガニ股といわず和服が大好きよ
あの人も本社へ移り太鼓腹
ゆとりある姿浴衣に渋団扇

尼崎市　高津徹也

晩秋や過去を鏡に問うている
視覚麻痺しそうリンゴをかぶりつく
組立てた心に秋のすきま風
情操は夕日健康は朝日

美称市　安平次弘道

プライドを〳〵すぐりやおら寄付のこと
裁判に勝てど治らぬ公害病
スモッグの空へなよなよ赤トンボ
早鞆の流れ寿永の哀史聞く（下関にて）

青森市　織田可津春

底貧にいてからくりもなく動く
エアポート妻もハンカチーフをたたむ
電話鳴るここからつづきそうな運
鳩バスでねむる白痴の子をかばう

兵庫県　河原みのる

空き鑵が大切だったナァ明治
生きえさという残酷がつきささり
天然色真竹の皮に極まれり
人類の跡目只今審議中

守口市　羽原静歩

アメリカの恥部をまざまざ見て歩き
鈍行の人の流れにある情け
貸しそうで貸してくれない生欠伸
アンケートやんわりしぼってテストする

富田林市　木村弥栄子

看護婦の今日は冷たい手に取られ
使い捨ての世に想出の捨て切れず
許すこと忘れて沙漠に佇つ女
生涯をあずけた鍵にとじ込まれ

生駒市　草深酔升

もう十年生きたいものと笑い合い
その口に乗らぬつもりが又も乗り
総裁選昨日の友は今日の敵
どぶ川を渡御船派手にのぼって来

堺市　伏見茂美

がんばってね六十にして起つ勇気
眠り浅く夜明けの色に変わる窓
時の流れ遅れまいとして日が暮れる
不機嫌な隣りを避ける日傘かな

島根県　中島英子

菊の葉へそそぐ如雨露で蟻もぬれ
盆供養如来も同じノッペ汁
隣席の香りへ気が散る参観日
香水の匂いも混じる踊りの輪

玉野市　小谷仙山

夏の月燃えて不倫の歩がみだれ
蟬しぐれ年甲斐もなく人愛す
灯台の我が身は黒い影を持ち

伊丹市　小川静観堂

卯の花やとなりへ越して来た女子寮
ステテコで武鑑出してみる雲の峯
精子一億一疋のほかは総懺悔

今治市　越智一水

夫婦二人夜市歩いてあっけなし
被爆二世語られなかったこと語る
古家のよさを他人がほめてくれ

高槻市　山田季賛

正直に馬鹿がつくよと妻の愚痴
工事終れば浮き草のごとみんな散り
横すべり合理化の波へ乗り

大阪市　木村水洞

家普請すれば長屋ケチをつけ
公害をしばし忘れて盆踊り
映画「ベルリン大攻防戦」
勝利者の立場で歴史つくられる

宇部市　平田実男

甲子園スカウト意識せぬ長打
中一で初潮母娘がほっとする
PCBどうのとまるまると肥え

鳥取県　渡辺菩句

胸に棲む妻は家畜のように慣れ
冗帳面妻の不満をこれと知り
酒飲まぬ覚悟に妻のあざ笑い

鳥取県　谷無閑

幸福を射とめた娘の太い指
反省をしたら腑抜けのようになり
過疎の村行商人から苦情聞き

★

西尾栞

平均寿命も延び手形の期日も延び
同情のいつしかペースにまきこまれ
処女!!他人には美しい言葉です
ついてないというのは努力のない男
禅寺の甍の反りの蟬時雨

菊沢小松園

同人誌才女らしきが編集部
老残のうたは己に聞かすだけ
針咄む言葉を天の声と聞く

二日酔女の匂う指になり
口拭うて世間知らずと思うてか

川村好郎

冷房を出て冷房のありがた味
値上りの妻の口癖聞く暑さ
奥様によろしく儀礼的に書く
失脚と聞いて妬心の矢を捨てる
障子一重ままならぬのもまた愉し

若本多久志

古稀随筆集脱稿（一句）
書き終えて我が自叙伝のうつろなる

老い三考

恍惚の我れにもむごき残暑かな
よってたかって老人にされかかり
晩年のゲーテにも似て燃えよかし

足摺にて

南無大師われドライブの寺巡り

北川春巣

盆踊りチビッコ広場あるを知り
サウナ風呂疲れのとれた声になり
ホラ吹いて真面目な顔で辞して行き
市内から郊外へ花持ち帰り
庭いじる帽子似合うの似合わぬの

二賞発表

中島生々庵

第七回を迎えた昭和四十七年度路郎賞、並に川柳塔賞（第六回）が、去る九月四日の常任理事会に於て決定されたので発表致します。

例年の如く路郎賞については六名、川柳塔賞については三名の推選者が既に発表ずみの中間発表句を再び厳しく詮考の上、最後の十句を常任理事会に持ち寄り、常任理事会は数時間にわたる検討を加えた後、結論に近いものを主幹の許に提出する、主幹はこれに基き全能力を傾けた上で、主幹の名において決定するのであります。

回を重ねる毎に、この二賞に対する柳界のご批判、ご鞭撻が深刻さを加えて参ります事は全くご同慶にたえないところと思います。

この上とも斯道向上の一助として忌憚ないご高見を承われば幸甚これに過ぎるものなく、又栄光に輝く受賞作者に対しましては深く畏敬の意を表し益々責任の重大さを自覚されてご精進の程を祈念するものであります。

47年度路郎賞受賞作品

瞼閉ず耐える苦痛が洩れぬよう

島根県大原郡木次町　堀江正朗

略歴

昭和十八年東京傷イ軍人矢明寮での三太郎先生の手ほどきには熱が入らず、その後妻の病気から心機一転して二人で三十九年に〝むらくも川柳会〟に入会。熱心な明朗氏と水客先生のご指導を受け、緑之助先生の人格に引かれて作句。四十年一月から故白柳先生や小松園先生の初歩教室で、また薫風先生はじめ諸先生、先輩の温かいご支援で今日に至る。大正元年九月十日生。家族は妻・長女・長男・二男。

路郎賞優秀作

瞼閉ず耐える苦痛が洩れぬよう

島根県　堀江正朗

路郎賞準優秀作第一席

耐えて来た拳を悔いもなく開き

倉敷市　水粉千翁

同第二席

余生など牡丹は知らぬいさぎよさ

香川県　三井酔夢

★

路郎賞候補作品

北川春巣

初めにいっておかねばならぬことがある。それは、近頃、わからぬ句が多くなったことである。従って鑑賞するにも選をするにも時間のかかること！一度や二度読み下しただけでは句の真意が悟れない。「詩川柳」もよいが、川柳は「常識」でもありたい。

もうひとつは、私事にわたって恐縮だが、「恍惚の人」などが最近出版されて、こちらもそれほどではないにしても、脳動脈硬化のせいか、何だか憂うつな気分に支配されて来たことである。従って今回推選した句も、前回に推選した候補作品とはだいぶ傾向が変っているように自分でも思えるのだ。句には絶対という句はあり得ない。現在はこの句が推選に値すると確信するのだから、傾向が違っていてもいたし方がない。前にも一度書いたが、選というものは、その時その時の選者の気分に大いに影響されるものだ。ということをつくづくと感じた。

路郎賞には、なるべくそんな気分には関係のない、客観的に見ての秀句を推選したいと思って努力したのが次の十句である。

マンネリを断たん木刀素振りする　谷垣　史好
感情を押える畳冷えて来る　岩田　美代
ローン無事払えますよう地鎮祭　宮川　珠笑
病気せぬ薬をあれもこれも飲み　木山　遠二
人の持つダイヤを愚かと思うまい　小出　智子
オートバイ十八才の音で来る　遠山　可住
引越しの後髪引く桜草　奥谷　弘朗
明日捨てる子猫がめしを食べのこし　岩本雀踊子
緑十字掲げて自然が破壊され　島居　百酒

推選句

魂の重さ精霊押してやり　有信新之助

この句、お盆の「精霊流し」の情景を描いて、人間の魂を見つめている。少し淋しいが、来し方、行く末を思い意味深長な句であると思う。

取捨に迷う路郎賞

西尾　栞

湖の色に絵具の躊躇なし　高津　徹也
手の冷えをあずけし夢をいとほしむ　久米奈良子
泣きすぎる女が通夜に来て白け　八木　千代
透明なガラスに思考力がなし　小砂　白汀
すさまじきものに女のうす笑い　三井　酔夢

準推薦句

父の日の父は木曽路の旅に居り　本多　柳志
さっとくるライターに気が疲れ　有信新之助
耐えて来た拳を悔いもなく開き　水粉　千翁
瞑閉ず耐える苦痛が洩れぬよう　堀江　正朗

推薦句

閏年一日さみしい日がふえる　谷垣　史好

中間発表で、好郎氏も推薦しておられるが、恰度本年は閏年であった。一読、深刻なようで、どこかとぼけていて、作者より読者をして、それぞれの感情に於て、鑑賞出来る幅広い奥のある句である。さみしいは淋しい寂しいの口語体であるが、詠者は極度にさみしがっているようでも、亦感傷がっているようでもない。ふえる一日を、詩人の作者は、さみしいと思うだけである。唯単なる、うがちだけに終っていないのがこの句の身上である。

★

菊沢小松園

コップ酒両掌に包み明日がない　吉岡　美房
車椅子ある夜走った夢を見た　田垣　方大
胸に住む人ありきれいに女老け　木村弥栄子
もて過ぎた夜はプスッとして帰り　河内　天笑
働けば叱られそうな国になり　工藤　甲吉
音に生き音の多きをもて余し　堀江　正朗
すさまじいものに女のうす笑い　三井　酔夢
背を見せるとき崩れてるサングラス　垂井　葵水
雄蕊に囲まれて女の髪匂う　槙田　英詩

推薦句

猫の足拭いてこのひと子を産まず　本多　柳志

★

若本多久志

桑食べて蚕運命にさからわず　西川　誓二
宝石を蹴っておんなの道けわし　水粉　千翁
放してやったこおろぎらしい声で啼き　小出　智子
役不足いわずに城の石ひとつ　高杉　鬼遊

胸に住む人ありきれいに女老け　木村弥栄子
自嘲して夫につくす性も愛　出原　敬一
哀しみの終るときなし女生く　吉岡　美房
横断の母の背中で旗をふり　隠岐　不酔

準推選句

蝶々のつかれ地蔵の肩を借り　高橋　鬼焼

推　選　句

落葉にも居心地のよい隅があり　若林　草右

（評）哲学と詩が渾然一体となった秀作

★

川村好郎

これこそ路郎賞にと推選する句が発見出来なかったのを残念に思います。

閏年一日さみしい日がふえる　谷垣　史好
時計ふってみるお前も疲れたか　高杉　鬼遊
刺の無いバラになりたい割烹着　小野　克枝
背伸びしている爪先の痛いこと　小出　智子
落丁あり乱丁あり人間です　不二田一三夫
余生など牡丹は知らぬいさぎよさ　三井　酔夢
直ぐ補正組める政府が羨ましし　吉田圭井堂
夕やけに融け合わぬままの雲もあり　岩田　美代
息づくもの夢あるものよ草の芽よ　高津　徹也

推　選　句

母をさす指から知恵がのびてゆき　水粉千翁

とかく抽象的な頭で作った句が昨今多く、自分の生活感情をぶっつけた句がやはり人の心に強く響くものである。初孫を恵まれて、こよなく愛していられる作者ならこそ、詠める生活詩である。着想表現にも抜群であり、私はこの句を今の柳界に示したい。

★

正本水客

湖の色に絵具の躊躇なし　高津　徹也
落ち葉にも居心地のよい隅があり　若林草右
風受けて廻るほかなし風ぐるま　小砂　白汀
敬遠の四球のような辞令が出　野田素身郎
泣きすぎる女が通夜に来て白け　八木　千代
元の鞘汚れた足袋を履く思い　木村弥栄子
一陣の風が緑を濃く淡く　松川　杜的

準推薦句

つき放す言葉も愛も持っていず　垂井　葵水

つき放す言葉と突き放す愛とは二つでなく一つのものである。過保護に対する深い批判の眼を忘れてはならない。

準推薦句

杉木立いま満月を差し上げる　河内　天笑

吹き上げるような杉木立、まんなかに延びている一筋の古道、その真正面に大きな大きな月が登ってくる。美しい情景だ、力強い色彩だ、そして大きな句だ。

推　薦　句

瞼閉ず耐える苦痛が洩れぬよう　堀江　正朗

家族で乾杯

堀江　正朗

薫風先生からの電話で驚きました。追うように岳人さんから祝電。妻の方がそわそわして泣いて喜んでくれました。一三夫先生からの速達でやっと実感が湧き、家族で乾杯して歌いましたが、その夜は眠れませんでした。昨年、緑之助先生からいただいた便りの「次はあなたの番ですよ」が実現してとても嬉しいです。温かい諸先生や柳友諸氏に生涯手を引っぱってもらって歩きます。

よろしく。

★

春の作句が秋に結実

谷岡芳枝

私にもこんな嬉しい日が訪れようとは夢のようです〝飾り壺の美しさ〟に見とれ私なりになんとか句にしたいと思い作句したのが春、ちょうど植物の実る秋にこのような結果でフラッシュをあびるなど誰が予想したでしょうか。私は本当にラッキーでした。

これを機会にまた初心に返ってと思っていますのでよろしくお願い致します。ありがとうございました。

47年度川柳塔賞受賞作品

飾り壺 一枝さされた事もなし

島根県大原郡木次町
谷岡芳枝

略歴

昭和四十五年一月むらくも川柳会へ入会。〔近作柳樽〕に投句をしたのは四十六年六月からです。本社の水客先生、明朗主幹、そして〝むらくも〟会員の皆さんの温い指導を受けて今日に至っております。私が病弱な為に大会に出る機会もなく、賞らしいものはまだ受けておりません。大正十年九月十六日生、主婦現在子供達が出ておりますので家は夫婦だけです。

川柳塔賞優秀作

飾り壺一枝さされた事もなし

島根県　谷岡芳枝

川柳塔賞準優秀作第一席

亡母点となりて心の海に佇つ

岡山県　嘉数千代香

同第二席

雑然とテトラポットは役に立ち

大阪府　玉置重人

川柳塔賞候補作品

戸田古方

いじらしいほどに自分を出したがり　村井西合

・ほんとにいじらしい人生よ。イメージチェンジそうですめがね買う　高杉千歩

・さりげなくめがねを買うがうれしい庭下駄を息子が履いてゆるくなり　谷のぶお

・俺に似よ俺に似るな、親の喜びと不安。輪の外でバックボーンを持ちつづけ　栂みどり

・輪の中ではほうばって。引く波に貝殻コロコロついてゆき　古結百水

・素直な情景を素直に。笑おうとすれば笑える庶民です　竹崎寛

・こみ上げる笑いでなくとも。庶民に生れてよかった。目覚めてもめざめても戦車が追うてくる　武内雅堂

・振り離すには惜しい社会批判。遮断機下りて構図ぬりかえる　小谷葉子

・葉子さんの珠玉の候補数句から選んだこの句。私の好みでしょうか。散ることを知らぬ造花の冷やかさ　槻谷一葉

・解りやすく、批判も行届いてるのですが。

推薦句

雑然とテトラポットは役に立ち　玉置重人

・秀句一句を選ぶにこんどほど迷ったことも珍らしいでした。あのとぼけたテトラポット、雑然としかいいようがない。それでいてちゃんとつとめを果している。人間不信、人間疎外の世に、やはり私流のソフトタッチの哲理でしょうか。

★

大坂形水

月の雫かポトリと一つ雨上る　高杉　千歩
受け付けの笑顔が消えて社のピンチ　熊野　溪水
父の日も父は泥田を這いまわり　吹田　三郎
父と子のアメ玉ほのぼのと対話　三宅　不朽
美しい耳に偽りささやけず　阪上十止庵
ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく　堀江　芳子
薬屋根のつららに童話ぶらさがり　脇本政己
着物の躾とり未完の恋を追う　小谷　葉子
平行線きびしいものをうちに秘め　榊原　秀子

優秀作

亡母点となりて心の海に佇つ　嘉数千代香

★

橘高薫風

つまずいた石に言葉のある如く　嘉数千代香
耳たぶの羞恥を知らぬイヤリング　ふきあげ虎城
嫁が来て養老院を禁句にし　岸本豊平次
人妻になって荷風を読みかえし　村井　西合
中年の長さに耐えるコップ酒　関　美子
天罰を分け合う人が居る安堵　垂井千寿子
梨になる花の盛りに巡りあい　高杉　千歩
飲むだけの友であったと知るベッド　三宅　不朽
老夫婦なにかというと二人立ち　吉田　文枝

推薦句

飾り壺一枝さされた事もなし　谷岡　芳枝

（評）推薦句は、一見平凡事を詠んだようにも見えるが、花弁を挿されれば生彩を放つ壺も、いたずらに孤に耐えさせられている、一脈人生に通ずる味があって趣が深い。一枝は「いっし」と読むと句が一きわ締まってくる。準賞には、本年度佳句発表の数から云って、千代香、豊平次、美子、千寿子、千歩諸氏を推す。

★

川柳塔賞選考経過

橘　高　薫　風

先ず三選者推薦の三句を検討、川柳塔賞は全員一致で谷岡芳枝さんの句を受賞句とした。次いで準賞二句を、年間の中間発表句を斟酌しながら検討したが、結局、古方、形水両選者の推薦句を該当句とした。三選者の推す推薦十句を見ても判るように推薦句が割れた結果である。準賞は多数の作家がタッチの差でひしめいていて、次期の活躍に大きな期待を持たせられた。

芙美子抄

高　鷲　亜　鈍

芙美子抄おまえの馬になってやろ
按摩して子を大学に出したという
老いてなお純情をたてつづけ
追い込めば袋小路に佇つ詩貧
父に似て好きな花札よく負ける
遠く近く見守る友がいてうれし
疎遠した友訪ねきてホッとする
毒舌を吐かずにおれぬのも因果
注射洩れ犬ならワンワンなけるのに
死にそこね元旦祝うに酒はぬき
詩を棄てることが主に仕える道なるや
人間らしく神や仏は死ぬとき拝む
見合して眼鏡をかけていたかしら
あてにせず頼らず貴めず奉謝のみ
年賀状に禁酒禁煙添書きす
中風の便りぼくより十も若いのに
嗤われていることも知らずに句を作り
死す時は虚空摑んで白眼をむかん
柱を背に十字架を型づくる
胡桃と胡桃指からこぼれ床にカタコト
嬰児の頬をぬらした初の母親
初孫を無理に泣かせて詫まる気
頼もしいかな反骨のチンポコ
初の孫初の母なり初の祖父

路郎賞
川柳塔賞
候補作品中間発表

自　四七年六月号
至　四七年九月号

路郎賞候補作品

北川春巣

皮フ科医の皮フ病皮フ科で診て貰い　阿茶
田が売れて皆目読めぬ軸をかけ　丁路
献血の列できれいな虹を見る　里風

寄席

寄席囃子ここでも食うか食われるか　一三夫
引越しの後髪引く桜草　弘朗
吹けば飛ぶよな気位にしがみつき　史好
魂の重さ精霊押してやり　新之助
明日捨てる子猫がめしを食べのこし　雀踊子
はしやいでも孤独酔い痴れても孤独　菁居
緑十字掲げて自然が破壊され　百酒

添え花を変えれば松の緑映え　弥栄子
立ち替り続く祝辞を耐えに耐え　一保
太陽をまん丸く画く子ではない　克枝
透明なガラスに思考力がなし　白汀
寝たふりで聞けば妻娘は父思い　十郎
追憶のこのへんからが腹が立ち　美代
さっとくるライターに気が疲れ　新之助
革命に縁なき顔よ満員車　史好
縄張りを水輪がつくるみずすまし　酔々
父の日の父は木曽路の旅に居り　柳志
すさまじきものに女のうす笑い　酔夢
はしやいでも孤独酔い痴れても孤独　菁居
ぬげ切れぬ殻を背負ってかたつむり　孝華
本家にはない子宝を分家持ち　軒太楼

西尾栞

己が城枕にさざえ焼かれたり　木石

働けば叱られそうな国になり　甲吉
化けるこつ覚えて女老けてゆく　岳人
余生など牡丹は知らぬいさぎよさ　酔夢
音に生き音の多きをもて余し　正朗
マネキンを脱がすに何故か羞恥心　史好

すさまじきものに女のうす笑い　酔夢
背を見せるとき崩れてるサングラス　莢水
雄蕊に囲まれて女の髪匂う　英詩
海静か女の歴史涯しなく　柳子
女です妻です今夜が峠です　トク子

若本多久志

たたかれてやむにやまれぬ鼓の音　水車
哀しみの終るときなし女生く　美房
強いられた沈黙女私語となる　村諷子
母を指す指から知恵がのびてゆき　千翁
母の日も母は静かにものを縫う　智子
わが道を行く足音のひとりぼち　可住
元の鞘汚れた足袋を履く思い　弥栄子
美辞麗句背筋つめたい別れ道　〆女
蝶々のつかれ地蔵の肩を借り　鬼焼
嘘ついて帰す男の手を握り　潮花
妻といて心わびしい雨の音　正朗
横断の母の背中で旗をふり　不酔

川柳塔賞候補作品

川村好郎

元気でなだけで通じる父の愛　侃流洞
お世辞抜きでという嘘の美しさ　葵水
余生など牡丹は知らぬいさぎよさ　酔夢
母をさす指から知恵がのびてゆき　千翁
さりげなく見守る母の灯も消えず　千代
夕やけに融け合わぬままの雲もあり　美代
孤独ではなかったくさす人が居る　凡九郎
息づくもの夢あるものよ草の芽よ　徹也
落丁あり乱丁あり人間です　一三夫
元の鞘汚れた足袋を履く思い　弥栄子

正本水客

敬遠の四球のような辞令が出　素身郎
男には見せまじ牡丹散るさまは　酔夢
春愁の膝に重たき夏みかん　智子
風受けて廻るほかなし風ぐるま　白汀
最終の学歴予備校とも書けず　丁路
酒好きと見たか律義についてくれ　旭童
腹立ててみても相手は妻と子か　正朗
元の鞘汚れた足袋を履く思い　弥栄子
一陣の風が緑を濃く淡く　杜的
亀が勝つものとおかしな信じよう　村諷子
つき放す言葉も愛も持っていず　葵水
プラットへ来てる犬お前も電車すきなんか　古方

戸田古方

吊皮がぶらりぶらりと終電車　豊平次
向う岸たしかめもせず橋をかけ　三和
ぽとぽとり椿が海に落ちそうで　笑子
目覚めてもめざめても戦車が追うてくる　雅堂
未来図を描く鉛筆は折れていた　溪水
遮断機が下りて構図ぬりかえる　葉子
三軒の時計が少しずつ違い　欣一
雑然とテトラポットは役に立ち　重人
苦労した話をしないから好かれ　思月
散ることを知らぬ造花の冷やかさ　一葉

大坂形水

永住の地は定まらず貸し植木　宏方
一芸に生き貧乏と勲章と　十止庵
どんくさいのが一人味方として残り　のぶお
大切なひと言ゆえに言いしぶり　西合
小走りに来て去る逢瀬それもよし　一歩
モニターと知って秤がぴんと跳ね　利美
父の日も父は泥田を這いまわり　三郎
ある決意おんなが拇印押している　千代香
着物の躾とり未完の恋を追う　葉子
ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく　芳子

橘高薫風

梨になる花の盛りに巡りあい　千歩
美しく語ろう満ちて来る潮よ　笑子
カーで来た花見桜を遠く見る　豊平次
自殺ではなかったらしい元女優　欣一
心配も程々にして酒になり　秀峰
飲むだけの友であったと知るベッド　不朽
駅看板そのままにして倒産し　豊平次
母のない児に参観日多すぎる　一星
老夫婦なにかというと二人立ち　文枝
老人は帰れとネオン輝きぬ　十止庵

川柳塔社常任理事会（九月四日）

毎年のことだが九月の理事会は二賞決定のため、息づまるような雰囲気に包まれ、決定するまでにはすっかり疲かれきってしまう。

第三者からみれば、もっとほかにも佳句があったように思われるであろう。えらばれた作者には、自分にはほかにもっとよい句があったはず、と思われるであろう。だが選考委員は責任をもって以上のように選んだのである。—すべてがおわり、野迷路氏や葵水氏からの陣中見舞のビールに疲れをいやす。出席—多久志・薫風・生々庵・水客・古方・柳志・文秋・形水・庸佑・栞・小松園・一三夫諸氏。

川傍柳初篇研究（百十一）

前田喜代人　川端柳風
故岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

659　出来ぬやつそこにやお鉢が御座りやす　眠狐

岡崎＝不詳。女に意中をあかして口説いたが、失敗した男が未練がましく勝手元でうろうろしていて目障りだ」邪魔である。皿小鉢など置いてあるところに腰をおろそうとしたりするので、つっけんどんに注意している――とは全くの駄労解。

前田＝「そこにお鉢が有りやすと出来ぬやつ」（筥一46）の句もあり、「御座りやす」、「ありやす」「出来ぬやつ」と遊里に関係がありそうであるがわからない。

清＝「お鉢」の語から考えると下女のような気がする。したがって、岡崎氏説に近い句解として、出来ぬ相手は下女としたい。

藤井＝遊里ではない勝手あたりの景。云いよった下女に振られ、飯時に茶碗に飯をよそってもくれず、冷やかに「そこにお鉢（めしびつ）があるから勝手に飯を……」とつっぱねられた。むずかしい句ではないと思うんだが。「ござりやす」で、この下女遊女上りのしたたか者の臭いがする。

川端＝藤井説のように思う。誰も居ないのを見すまして、口説いたのであろうが、下女はその手にのらず失敗したものであろう

高須＝お鉢は藤井説の通り「おひつ」で、この句「そこにや」がヤマ。すなわち「そこには」だから、ある場所を指していっているので、もし承知の場合には「ここえ」というところ。――柳雨説「オヤ、そこへ入っちゃいけません。そこには飯櫃が入れてありますのさ」で、コタツヤグラへ入城拒絶などは情なし――で設定は娘か？

丸＝柳雨説にしたがっている。娘ではなく人の女房などか。

岡田＝「出来ぬ奴」とは、得恋にあらず、失恋、恋愛の成立せぬことです。そこから出発せぬと、この句は解釈できません。これは高須、丸先生のいうように冬のコタツの場面です。寒国ではワラで編んだお櫃入というものがあって焚いたご飯が冷えないような用品もあるが、その用意のない江戸などでは、コタツの布団の中へ入れておく。（もちろん御飯蒸しなどという便利なものがなかったから。）この句はコタツで口説きかかった場面。

660　どふいゝくろめるかあまっ子をさづけ　葉十

岡崎＝「あまっ子」は若い女の子のことだが、ひいては小妓・新造のような種類の女の呼び名に使われている。大一座で登楼して、新造を割り当ててやったが、あの武骨な男が、どう言いきかせ納得さすのかと、おもしろがっている――と解釈したが、落ちつかない。

前田＝男が納得させるのではなくて、女が男を納得させるのである。

清＝老人客に対して新造をあてがったのではあるまいか。老人が若い新造をどういうふうに口説くかという興味があるのであろ

う。

藤井＝「どういいくるめたのか老人に不釣合な女の子がさずけられたわい」と、老人の口説き方に興味をよせた句。あまっ子だから武骨者より清説の老人をとりたい。

川端＝賛。金の力であろうが、多少ひがみもあろう。

高須＝あいにくアイカタが忙がしくて（あるいは具合わるく）名代を出した、前田説が一番オントウと思う。だから「どういいくるめるか」は、その新造（名代）のメンタルテストというわけ。そうやってだんだん女郎の玄人になってゆくのである。次丁に「名代をもう帰ろうの番につけ」という句もある。この新造、さぞあらん限りの知恵をしぼって、この「帰る帰る」とゴネル客をとめるであろう。

丸＝「どういってごまかすかと思って、あまっ子をさずけてみた」と解し、下心あって外出する亭主に女の子をおしつけている女房ではないかと思う。ただし「あまっ子」はやはり第三者的ないい方で、自分の子をいうには適切でないので、この解も自信がない。

岡田＝小生は高須氏の云われるように、遊里の名代説に解しています。だが「あまっ子をさずけ」ですから、名代の若い新造が客をいいくるめるのではなく、女郎が客に何かうまい口実で云いくるめ、名代の新造で我慢をしてもろう場面。

661　**三会めちっとも座敷明ケぬ也**　一　甫

岡崎＝さすが初会、裏と足を運んだかいがあって、三会めとなると、初めて箸一膳の主の馴染となり、

来る時に小道に寄らぬ三会目　二一・25

は床花を目当てにしているが、ほぼ

三会目ちっとは女郎買ったやう　一七・18

のもてかたとなる。

藤井＝賛。平凡。明けぬ也は、常につきっきりの意。

川端＝賛。

三会目しょぞんがあるで早く来る一八・21

三会目みしり〳〵とよじ登り　一四・35

祝儀・床花・台の物など「みしりみしり」のふところ具合に「所存」があるのであろう。持てた客である。

高須＝三会目ともなれば、ともかく好き嫌いは言っていられぬ。下へもおかぬ優遇をしている句で

三会目ばかりが江戸のはりにもれ　藝道6

江戸女郎のハリも、三会目だけは別だというわけ。

丸・岡田＝諸説賛

662　**半鐘の下で四手にひらり乗**　眠狐

清＝「半鐘が落ちると四ツ手みぢんなり」（笆二、35）という句があるように、吉原への交通機関である四手駕は、火之見櫓のそばで客待ちをすることが多かった。この四ツ手駕に乗ったのは吉原へ遊びにゆく男で、ひらりと乗ったのは遊びなれているためと、人目をはばかるためである。

藤井＝賛。ただし最後の「人目をはばかる」はとらない。むしろ吉原遊びは男の見栄であり、はなやかな夜会場へ行くのに、得意に駕にのるのに「ひらりのり」といったもの。猪牙舟や駕に、遊び人らしく乗るのを得意とした江戸人だから。

川端＝賛。「ひらり乗り」は藤井説の通り心のはやるさまを表現したものと思う。

高須＝前出「はへぬきの階子のそばで駕イ駕」（眠狐）と作者まで同じとは。「ひらりのり」は、いかにも軽快に乗ったサマがでている。

前田＝この句の先導となったのは〳〵のぼるべからずへ駕かきもたれてる」で、作者はやはり眠狐である。「ひらり乗り」「のぼるべからず」など、作句のコツを心得ていて巧である。

丸・岡田＝礎稿および藤井説賛。

句とことば
白石朝太郎の世界
序・白石朝太郎・大野風柳他・本文2色刷美本・定価千円・送料百五十円。
新津局内本町1（振替新津1620番）
発行所　柳都川柳社

近作柳樽

菊沢小松園選

ひとりでも生きられそうよお月さま
顔みれば気がすむだけの間柄
ひと言にブレーキのきくとしになり
女です走らすペンも身を守り
面影へにじむ涙がふききれず
やさしさの限界を知るおそろしさ

岩国市　村井酉合

石にも八月六日の貌水を恋う
今朝の水ひしと身にしむ原爆忌
スクラップの山残飯の山地球病んでいる
痩せた胃へなぜにしろきか天の川
絡みあい縺れあい朝顔咲いてみせ

竹原市　三宅不朽

絵日記の都合もあろう海へ行く
行く夏を地味に酌む日の花茗荷

出雲市　板垣草丘

八十年ぶりの豪雨
宍道湖はもと海だった海になり
避難する筏が橋の上をゆく
田の上を行く百姓でないボート

和歌山市　樫村ふみよ

初めての夜を肩よせる十姉妹
あみだくじ引っ張り込まれた方が勝ち
おやすみを窓の月にも言うて閉め
どんよりと空に心配あるらしい
とぎたての包丁持てばひきしまり

新宮市　川上富子

追いかけて追いかけられて夫婦仲
ヘソクリを集めてささやかなプラン
見のがしてくれとサザエのひとり言
うちあける愛へペン先選ってみる
いつわりを書くペン先が割れている

青森県　波　ただお

空青し天に向って話しかけ
戸を閉める音にも感情こもってる
打ち上げた花火に夜の血が騒ぎ
お盆には過疎地の墓も煙たち
寝ていても見られる花火のありがたさ

島根県　榊　原　秀　子

梅雨上る真一文字の飛行雲
暑中見舞みなそれぞれのありがたさ
先頭へ立ったばかりの廻りみち
みたされて人の不幸に淡白な
のんびりと育つた匂いまだ残り

大阪市　小　谷　葉　子

おそ咲きの雌蕊真実の花粉まつ
柿の葉にいつまで蟬の殻濡れて
国内を廻る一円貨にもなれず
小波を哀歌ときいて渡り鳥
失恋のいつか白樺秋を告げ

和歌山市　秋　月　宏　方

ふるさとの土踏む道もなつかしく
土間を這う蟻大陸だなと思い
お見それしましたパチンコ屋で出逢い
宝くじつなげば月に届きそう

岡山県　嘉　数　千　代　香

糸切れた凧が自由を見失ない
サイレンのひびきへ夫をおいてみる
向日葵の不貞炎暑に首を垂れ
夫唱婦随つまずきそうな石がある

大阪市　阪　上　十　止　庵

金のいる役は女房にきいてから
すぎ去ってあれが青春かと思い
愛情はやっぱり妻の背にあった
亡骸で生きよと処世訓がいう

鳥取市　佐　々　木　静　泉

京都への旅

福祉法に触れそうな妓が茶を配り
観覧料上げてもやはり池にごり
京都まできてお茶づけでしまう昼
さもしくも寺の広さへわが家置き

竹原市　脇　本　政　己

四次防ダルマはついに目をあける
金のない負けず嫌いが哀れなり
海へ行くかわりはやばやわかす風呂
ベトナムにふれず教会の人帰る

島根県　堀　江　芳　子

挨拶の病むだけ病めばにもすがり

とばっちり貰う日あげる日夫婦です
子を叱るための正座は佗しすぎ
好きなもの気ままに食べて痩せたがり

大阪市　柳原静香

今日帰る子へ冷蔵庫満たしおき
愛不信心の棘が抜けきれず
老夫婦語ることさえない散歩
争って出たのに娘の迎え傘

竹原市　生信笑子

旅が始まる女の目には涙がない
水をくむ女せせらぎの中に立ち
十字架が重し女として生まれ
炎天下ホクロを数える程に暇

羽曳野市　大峠可動

明日に向って僕の行進が始まる
まわり道して来た人間の輝きよ
少年のドラマ緑の野を好み
支え合う心の杭を揺り起す

横浜市　増田豪城

五次六次先が気になる四次防
食当りみんな手ブラの見舞客
でんでん虫おのが値段を知らず這い
長旅の子の風鈴が鳴り過ぎる

大阪市　小谷清女

此の糸の不仕合せなり喪服縫う
気兼ね無いあくびで朝の窓をあけ
ひれ伏して女湯シャンプーに暇が入り
飛び付いてすぐ飽きっぽい文化人

島根県　槻谷一葉

音痴でも真直ぐ育った子守り唄
日記帳もう鍵かける子に育ち
しじみ貝お前に罪はないものを
飲みこんだ言葉そのまま消化され

東大阪市　落合思月

妹のデートにヒステリせきをきり
父だけの刺身がじゃまな冷蔵庫
家をつぐさだめ過疎からぬけられず
あなたからパパにかわってベビー抱き

竹原市　楠貞子

正論が辞める間際に認められ
プライドを捨てれば背広などいらず
大和魂が泣きそうストがまだ続き
癌でない病名だけに支えられ

鳥取県　林露杖

安芸の宮島
引く潮に蟹進退を考える

秋吉台にて

秋芳洞太古の冷えの一雫

島根県江ノ川流域一句

豪雨禍の庭にカンナの朱が燃える

一本の丁子ドラマの果てるまで　大和郡山市　森田カズエ

替芯のどれもあわないボールペン

九号がくる竹やぶの揺れぐあい

母の老目にきて歯にきて脚に来て

病室の午後を漫画の廻しよみ　守口市　樋口一峯

米値上げ作らぬ農家に奨励金

天神さん冷し飴など売っとらず

床上浸水に拾う

現物が畳の上まで押寄せる

巡査まで道路の鮒を追い廻し　守口市　野呂杜月

此方さんジュースですのと素通りし

観光客尼僧をどぎまぎさせて去り

炎天下燃え出し相な髪々々

良心の混らぬ水に死ぬハマチ　今治市　今井松花

降る度に雨漏ちゃんと成長し

これでまあ女とあってバー勤め

逆転の一打も出さず凋みかけ

定退後セルフサービス馴れました　今治市　古野伶人

お前もか猫ゆうゆうと去って行く

十割の愛を五人の子に注ぎ

入れ墨が腕から覗く金魚売

長い梅雨外に出なくて済む稼業　和歌山県　ふきあげ虎城

こらえても涙こころにさからわず

ハンダ付けしているどっちも二度の縁

引き金を構えて戻らうともしない

デイトする相手に指輪変えて出る　今治市　蔦本昌道

女らしさへ男らしさが求められ

形式とムードで意見すれ違い

平凡な話題がこわい陥し穴

ビジネスへ飯場の汗を憚らず　八尾市　高杉千歩

浜木綿の花に蜻蛉の生きている

恋すすむ娘海へふり向かず

水溜りのネオンゆらゆら戎橋

旅先きの便りを地図で追いかける

鳥取市　藤本佳女

三億円罪も半分消えかかり
児の画いたバラどの花も蝶を止め
立並ぶホテル砂丘に養なわれ
標準語で飲んでケンカは国なまり

東京都　宮崎美津子

湯の香り届けと老父の速達便
くしゃみする産湯に家中ゆれうごき
肩持てば疑われそうで同調し

仙台市　川村映輝

子が倍増さらにアルファーの孫があり
口笛を吹きたいような空欲しい
水かけて八百屋の店がよみがえり

永見市　関美子

キッスして来たのを知らず老歯科医
橋上の恋にも慣れて船世帯
やけくそのように鳳仙花がはじけ

守口市　岸本豊平次

親に似た手で幸を手さぐりし
かゆいとこ痛いところを知って妻
どんぐりが揃って長屋波立たず

七尾市　松高秀峰

総選挙近し大臣顔を出し
一票が欲しい暑中の見舞状
大臣の椅子が待ってるように云い

大阪市　堀口欣一

高砂の名も公害の町となり
百米ほども匂わせ漢方屋
人妻にいささか酔が廻って来

寝屋川市　福富隆子

扇風機昼寝にまわす手内職
家族皆好みがちがうさじ加減
礼言葉気に入りましたか又くれる

羽咋市　三宅ろ亭

講演の原稿笑わすとこも入れ
能登ブーム時忠卿は迷惑し
下げられた利子よんでいる太い指

大阪市　河原林比呂路

つけまつげしてまで嘘がつきたいか
鈍行に訛の変るおもしろさ
ひよっとことおかめでいつも仲がよし

松原市　玉置重人

追伸の方に本心さらけ出し
黒幕のシッポは女が握ってた
箱根旅行
視界ゼロヘロープウェイのクーポン券

橿原市　西本保夫

平社員の方が気になる社の利潤
いつも傍に妻がついてる平社員
経験ですらすら片付ける平社員

竹原市　簑田浄美

顔馴染み別れたくない人ばかり
札束に縁遠くなる日も近い
瞳を閉じて微笑む距離にいるあなた

大阪市　大西為二

魚市場かえれば外すサングラス
針と糸かりてやさしい手もかりる
石けりのとこだけ除けて水をまき

尼崎市　中谷利美

持ち家と借家で寄付も差別され
妊婦服おんなは損な生れつき
妻よりは早く死にたい胸のうち

宿毛市　山本窓花

九号台風水害一句

水攻めにおうて食事にこまる水
孫誕生ガラス戸越しの初対面
くされ縁年とるほどにかばい合い

今治市　渡辺南奉

あきらめてから倖せが向いて来た
誰れにあげよう一本だけのバラを持つ
おくびょうな恋へ花火が明るすぎ

鳥取県　福田陽山

燦々と陽光暑さも汗で受け
クーラーの部屋隣の和室と断絶し
老人の福祉足踏みばかりして

大阪市　松本市郎

遺言めいた事ばかり書く日記
女房の貴重さ病んでからわかり
父の跡父は嗣さず海渡る

大阪市　藤田頂留子

夏空へ一筆書きのジェット雲
花すなおここが大地と鉢で咲く
デパートで鑑札入らずの露店ショー

岡山県　武元柳子

泳ぐ子の見張りの役目に汗たらし
炎天へ人を吐き出しバスが行く
たとえばと話の団扇持ち替える

島根県　谷岡芳枝

そむかれた夜は川さえ寂として
息切れを忘れる山頂のすばらしさ
放言に耐えて切花水をあげ

島根県　栂みどり

輪にとけて踊る心の顔なじみ
草かげを歩きつかれたかたつむり
人形との対話淋しさつのるばかり
松山市　谷　のぶお

貸します貸します貯金している人にだけ
使い捨てごみ取りさんに怒られる
定年を延長してももう遅い
羽曳野市　麻野幽立

納得をさせる時間を稼ぐ酌
触れて欲しいことあり水を向けてみる
金で済むことだが額が定らない
米子市　増田竹馬

急行を避け鈍行のベレー帽
手花火に遠く幼き日のロマン
会食に入歯忘れたあほらしさ
島根県　安達潮音

ささやかな倖せ子等と酌む笑顔
残照へあすの仕事の胸をはる
故里の親も待とうに今日も酒
茨木市　日高文子

美しく老いたる人の舞姿
公害を出さぬくらしに手間がいる
そそくさと無職と書いて子に渡し
今治市　大本バット

ぜに金の事はばあちゃん未だ確か
抱いた顔見直して泣く赤ん坊
ビタミンのような女房で物足らず
今治市　真山国彦

お作法と躾の本は母が読み
バーゲンで揉まれた汗をレジで拭き
ホッチキス何時外れるか此の二人
今治市　原田輝親

俺の悟空が仏手の中を飛び廻る
石臼の油断ぼうふらアジトにし
紫陽花のその後の色は雨で見ず
和歌山市　垂井千寿子

石投げて噂の外に逃げている
裏町の星もきれいに光ってる
ネクタイが若過ぎるとは妻言わず
八尾市　高杉力

あてもなく坐れば入道雲一つ
さし出して見せる青春持っていず
ともかくも動いておれば迷わない
大阪市　塩満敏

子をもってきこえぬふりもうまくなり
巾広の帽子が似合う妻と知り
橿原市　岩井本蔭棒

止め役が居るからこぶし振り上げる
金持ちの犬にも人を侮る目
河内長野市　井上克美

売れた顔どこへ行っても話し込み
全盛が過ぎた我が身は肥り過ぎ
寝屋川市　江口度

大掃除ちりは出さずにやれと云う
盆休み互いの故郷を問い問われ
備前市　武内雅堂

地下街は焦熱地獄かも知れず
水平線越えると青い海がある
愛媛県　小山悠泉

事故起きてから対策を考える
生前にふれ住職の話し好き
新潟県　市川一峯

飲まぬのが小言も云わず後始末
遠回りしてもおもちゃ屋孫みつけ
大洲市　堀内暁風

飾り皿ご馳走の味知らぬ皿
新築をしたがローンが気にかかり
島根県　安達小茶坊

追われる身常時背中へ目が光り
個人差があって道徳うら表
島根県　東原福子

自動車に振り廻わされている家計
男嫌いで通りロマンも抱いている
島根県　岩田三和

民謡の汗から生まれ今も生き
青森県　岩淵一星

通信簿孫百円で見せにくる
ふところのいたまぬ酒に三味も呼び
大阪市　岡本まさひろ

沖は沖で男波女浪ももつれてる
煮えきらぬうちに秋風吹きはじめ
大阪市　平井露芳

トンボにも欲しいきれいな水と空
動かせば無限に砂は時刻む
鳥取市　大塚豊生

ファインプレー敵も味方もない拍手
出世する子が次々と家を捨て
藤井寺市　古結百水

やる気さえあればと他人事けしをかけ
梅を干す女房も世帯も古びたり
弘前市　小山内貞男

句読点うった見たいにベルがなり
人間の弱さ肩書きつけたがり
堺市　栗本藤持

追い越され乙女の匂いしばし保つ
神経痛柳腰にも容赦なく
竹原市　古江雅鳳

泥船の徒労の日々をくりかえし
母恋しはるかな雲の夕暮れに

大阪市　新川貞祐

点滴に合わす育てた鈴虫が
病院を楢山にした嫁の孝行

今治市　伊藤一郎

ストをする時だけ車　車庫に置き
数量に限りが有った特価品

泉佐野市　大工静子

蔓追えば瓜は隣地で居候
足蹴あり接吻もある小鳥見る

高槻市　山田スミ子

想い出が次々浮かぶ秋の月
ふるさとの墓地だけと言う故郷有り

大阪市　松岡茶々坊

やけ酒も飲めぬ病いを持つ辛さ
親切も過ぎれば人も寄り付かず

鳥取市　藤本恵子

天の川故郷へ続く懐かしさ
倖せが拝む心を忘れさせ

鳥取市　藤本鎮也

借りる気で話す相手も金がなし
アイシャドー良妻賢母の顔でなし

鳥取市　藤本和宏

言論の自由へ若さまくしたて
間違って起きて日の出にある美観

河内長野市　森本黒天子

クーラーを入れて昼寝を友にさせ

池田市　石井文三郎

澄む月を故郷の山に置きかえる

和歌山市　島本泰子

初白髪母そっくりの位置に出来

名古屋市　吉田文枝

送り出す言葉かわらず気を付けて

兵庫県　高橋近江

どないなといけたらよいと老夫婦

大阪市　松岡茶々坊

旨い汁吸うて新聞種になり

大阪市　鈴木生仏

鰻焼く前をゆっくり喚いで行き

大阪市　須浦つね

禿かくすカツラもあります美容院

大阪市　吉野志津

親方日の丸上方落語花ざかり

大阪市　花田繁子

ガイドさんが変ってドット笑わされ

大阪市　内藤ますゑ

朝早くから蜘蛛の糸に虫かかる

大阪市　木村濁水

夏来れば子供の顔の地蔵尊

大阪市　今井隼人

老人会相当遊んだ粋きな唄

川柳塔社　主催

47年度・二賞発表句会と同人総会

会　場　妙見宮　**自安寺会館5F**（南区道頓堀）
電話（213）0330（代表）
（地下鉄日本橋から歩いて3分、二ツ井戸）

柳　話　中島生々庵

★路郎賞・川柳塔賞・句会出席No・1表彰

兼　題
「パワー」　川村好郎　選
「繁華街」　若本多久志　選
「乾杯」　菊沢小松園　選
「王冠」　西尾栞　選
（三句以内厳守）

会　費　300円（席題二題の予定）
★投句だけの方は郵券五十円封入

▼地方からご出席の方で、会場への案内図ご入用の方は本社へお知らせください。
▼案内図はP64をご覧ください。
▼**同人総会は午後三時から。**
総会出席者に副理事長以上の色紙呈
（同人総会の案内状は出しませんが、出席者によって議題を採決させていただきます。）
▼**二賞発表句会は五時半からです。**

全員集合！
10月8日！

近詠

須坂市　**高峰柳児**

義理を欠くことへ理由をさがしあて
脇くりを孫へ貢いで老い平和
予備校へ籍おいたまま徒食の身
義理がたく断る智恵が行詰り
世話好きの汗そろばんを別におき

大洲市　**米沢暁明**

先生のうかつ生徒のペンを借り
庖丁へ知能指数と別な腕
肩書きも増えて広がる守備範囲
生きかえる過疎はお盆と正月と

今治市　**月原宵明**

仙人掌へ蝶は足場を心得る
旧暦を信ずる漁夫に月欠ける
剃りあげて夏を耐え抜く紗は黒し
一大事花嫁トイレに行くという
軸揺れる音うたたねのこころよさ

岐阜市　**市川鱗魚**

六法も読んであるのも又困り
のんでねるだけの酒量も又上り
母一人遺産話に遠い位置
土根性かないチンピラが肩を張り

今治市　**長野文庫**

逃げんでもよいのに蟹のあわてよう
脱線をする人でなし箸おがむ
急ぎ足察してくれぬ自動ドア
薬瓶王に持たせるスポンサー
魚ごころ認可で返す水ごころ

起してうけてひねって結ぶ

東野　大八

本誌八月号で小谷葉子さんの書かれたもののなかで、つぎのくだりがある。

「うーむ、これはおもしろそうだ」

「中は読まなくてもよろしいのですか」

と原稿の場合、おたずねしますと

「原稿は始めと終りを読めばわかる」

と不二田様は云います――云々。

フム、さすがは編集人不二田様だワイ、と私は思ってニヤリとした。まさに不二田様のおっしゃる通りだからである。

今月はこのことについていささかながらウンチクを傾けたいと存じまする。

モノ書きの定石には、起承転結という言葉がある。わかりよくいえば、起してうけてひねって結ぶということである。この作法がかなえば、その原稿は一応使えるのである。

私など若いときには、この起承転結なるものについて、そりゃあヤカましくいわれた。いわばこのことが、モノ書きの金科玉条――といえば大層だが、要するにエキスそのものなのである。不二田様の場合は、起と結の首尾でピタリと中がわかる。私にしてもパッチリその流儀で生原稿の撰択に当ってきたわけである。それは一行のコント・川柳にもいえる。

今日のテレビ、ラジオなどの作劇の構成など全く起承転結を絵に描いたようなもので、これが一つでも缺ければ、そのドラマは完全に失格である。つまりみる人、きく人をうたないのである。早い話が川柳など、その起承転結の好サンプルなのである。伝統川柳がわかりやすいということは、まず、この基本的な作法に由来する。難解句は、この四つが不そろいなコトからまず頭痛をともなう。

――やると思えば　どこまでやるさ（起）
それが男の魂じゃあ　ないか（承）
義理がすたれば　この世は闇だ（転）
なまじとめるな　夜の雨（結）

――この子よう泣く（起）えっぽどよう泣く（承）親が泣き泣き（転）出来た子か（結）

あとの方は、伊勢あたりの子守うただが、むかしの子守娘の、泣く子への呪いは、その子の親への怨み言にもなる。このあてつけの切なさと、「子」から「子」へきて結ぶ回帰性をもたせる一種のポーズが、モノ書きのクロウト筋ともいえる。このスタイルを十七字にまとめたものが川柳となるが、川柳の転と結は、つねに短く「てにおは」の一文字にも要約できるのである。句の活殺は、一文字にあるところが、川柳のもつ鋭敏性であろう。「穿ち」とは私流の判断では、転こそが決め手のような気がする。事例の子守うたの転は「親」の一字にこめられている。

中国の唐詩の絶句は、典型的な起承転結の作法で完成されている。元曲にもそれが明瞭に享けつがれている。このことは中国の作詩法の影響が春夏秋冬の四季からきたことだと私は考えている。春は生々の発動期で、夏はその繁殖賛歌だ。そして秋風とともに一転して落莫となる。かくて冬に至って生々は沈黙し、地下にもぐって春を待つ。

春水四沢に満つ　夏雲奇峰多し
秋月明輝を揚ぐ　冬嶺に孤松秀いず

陶淵明の有名な「四時の詩」の五言絶句は右の通りだが、これを武玉川の慶紀逸は「淵明の四時の詩を分て印と成し……」四時庵と号し、手に弄すること久しかったのである。俳諧とは、まさしくこの四時の刻の絵解きであり山水画の風流にこころした事例である。

十七世紀フランスの古典劇は、元曲の亜流ともいわれている。この作劇の構成は、四幕が基調であった。このスタイルが現代の歌曲ではシャンソンの歌意にいみじくもうけつがれている。シャンソンの極めつけは、男女の出会い、そして恋の成立、そのあとはどちらかの裏切り、最後が破局の嘆きという具合がそれである。

このごろの歌謡曲をきいていると、その歌意が圧倒的にセックスの哀歓である。まるでシャンソン流の作意横溢の観がある。この点若干異質の歌唱ぶりを示しているのに演歌がある。村田英雄や水前寺清子、北島三郎などがそれである。彼等のうたう演歌調は、まさしく起承転結の歌章にほかならないわけである。村田英雄得意の一つ〝人生劇場〟は、この稿のはじめに書例としてあげた、あの通りである。〝王将〟なども同様である。

演歌は、演歌史を追うと艶歌になり、創生記は壮士ぶしにつながっていく。

演歌を生んだ壮士ぶしは、明治初期の自由民権思想からの産物である。チョンマゲを切り落したばかりの、明治維新の夜明けにはじまるコミュニケーションのアピールは、民権論者の「演説」にあった。この演説が弾圧にあうと「歌」にすりかえられて街頭に出たのである。大衆相手のこの壮士演歌は、明治二十年以後から全国的に波及し、各種の団体がぞく出したのである。ダイナマイト節やヤッツケロ節のアジ歌は、オッペケペーの川上音二郎、貞奴を生むことになる。新聞が一般化するところまでいっていないニュースソースは七五調の演歌にこもるもののなかから、大衆は吸収する。ザラ紙一銭売りの長大な歌詞こそがいまでいう新聞社説の七五調であったわけだ。反戦や政治批判や文化批評が、諷刺、ユーモアを織りまぜ、一般大衆の耳から浸透していったことである。世情が爆発的にこれを支持したのも必然の成り行きといえる。

ところで、どこの柳誌であったか「庶民」の扱いについて、一般的大衆の呼称でないとかどうとかの論旨が最近載っていた。嫡子と庶子まで引合いにでてのことだが、私からいわせれば、こうした言葉は明治初年の文明開花の階級性意識たけなわのころおいの話で、論ずるに足りないと思っている。

そもそも大衆なる言葉は、仏教用語から出てきた言葉だ。明治のザンギリ頭が出来上るころまではこんな言葉はなかった。「万機公論に決すべし」というデモクラットな近代国家で発足したはずの明治政府であったが、チョンマゲは切ったが、その中味は藩閥意識の封建性でコチコチだった。その石頭共に対応する自由民権の一般人士の呼称について、はじめて大衆なる言葉が、仏典からひっぱり出された。往時の学識硯儒ただならずを気負う、八字ヒゲの新聞記者連のどうせアイデアであろう。「大衆」の前身は「平民」であった。初手平民といっても上と下とに一つずつあった。上が士族で下が新平民だ。これではならじと社会の木タクが民をこだてにとって考え出したのが民衆とか庶民である。帰するところ社会の三角底辺に住む一般民の呼称にはちがいないとあって、民のこだわりを捨てて広大無辺に仏典に還って大衆の造語をひねり出した—少くともこのコースに私はまちがいないものと思っている。嫡庶の文字など戸籍法のこだわりにすぎない。随ってリクツになってもイミはない。起承転結がへんな転結になったが、要は演歌も川柳も駄文もこのことによって存在するということで結んでおこう。

みなさんもこの四文字でモノをかく勉強をして下さい。さすれば不二田様も「塔」が立つとお喜びだろう。

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

浜田久米雄

来世の契り女房に断わられ　工藤甲吉

もち論冗談から出た来世の契りだと考えられるが、言うた方も言うた方だし断わった方も断わった方で、どちらも愛嬌があって実にほほえましいことだ。夫婦の相性が完全無欠というのはおそらく少いのではなかろうかと思われるが、故にこの間の夫婦のやりとりにユーモアが漂う。

方円に従う水の大あばれ　山川阿茶

水は方円の器に従うとは、従っている水が四角と丸い器に入れられて静止している状態である。ところが従わない水となると困ったもので、山を崩し家を流し人を殺すのである。静かな水の中には堰を切って流れるおそろしい力が潜んでいる。静から動へのきつい見方である。

駅長の日焼けをみんなけむたがり　石川倪流洞

駅長にもぴんからきりまであり、大きい駅もあればちっぽけな駅もある。この句の駅長は駅の構内をよく巡回して運転、傷害事故のないように点検をする張り切り型であるから日焼けもしよう。この構内巡視の多い駅長はけむたがられるけれども、その駅は無事故がつづくのだから有難いことではないか。

馬鹿踊りする人生があってよい　小野克枝

馬鹿踊りは阿波踊に限られてはいない。飲む程に酔う程に起ち上って無茶苦茶な踊をやることもあるし、その外狂気じみた踊りは随分あることだ。作者の言わんとするのは人生のひと齣のなかでうつつを抜かして踊り狂ってもよいではないか。時にはそれ位の茶目気、息抜きをして世の中をたのしく過したいとの念願が伺われて愉快である。

借りものの歯と尺八知っていた　松川杜的

都山流大師範松川杜的さんだ。老化現象ともなればこれを補足する入れ歯はやむを得ないこと。尺八が知っていたとは尺八の主の謂であろう。入れ歯する前とした後の音色を聞きわけるのは魂の入った尺八であるかもしれぬが、入れ歯した主の老化を淋しがる心根である。

かかる世にきれいに生きて来たを悔い　木村弥栄子

実にかかる世である。欲ばり合い、だまし合い、なすり合い、見栄っ張り、自己本位、けち等。いくらでもある悪業の世の中だ。この世をもっときたなく生きておればと思うのは人情ではあるが、これはきれいに生きて来た人の良心がそうはさせないであろう。

一歩後退二歩前進の策と決め　河井庸佑

世渡りはむずかしい。どんどん進んでいると道を違えたりおとし穴に入ったりする。一歩後退は前途をたしかめるための自衛手段でこれで二歩進めば結果は一歩前進となる。自戒自粛を促して妙味津々たる句である。

ひがんでる男同士で馬が合い　奥谷弘朗

ひがんでいる者は友を呼ぶ。その友もまたひがんでいるからだ。かくして似たもの同士は大声になり小声になってうっぷんを晴らすのである。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二 — 四
夜間 (762) 四四〇八

近作柳樽

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

いからせた肩倖せを寄せつけず　村井西合

内容のとぼしさを現わすようにいからせた肩、周囲の真心や平和を拒否することが、男のかっこよさとでも思っているのだろうか。

神様とトボトボ歩く負けている　嘉数千代香

大師さまと同行二人は自分の心に勝とうとする足取りであり、これは全く逆の場合である。二呼吸にした表現も成功している。

語らいを誰かに聞かれたいスリル　川上富子

静かなクーラーを買って近所に分らないのがチト残念だというコマーシャルを何となく思い出した。新婚の甘さを云い得て美事。

ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく　堀江芳子

夫との日々を喜劇と観じるまでになれば、病後の恢復もほんものであろう。上八のほんわかも句主には珍らしい出だしである。

活け花の残りですけど仏様　宮崎美津子

花屋で仏花を買うと、それこそ残り花のようなもので高い値をとられるのは何故だろうこの場合の残りですけどは、活け花の一、二本を別に取り分けて置くのである、清潔な家庭が感じられる。

安静をとかれた夫と死のはなし　柳原静香

危険状態を脱した安堵感、あなた本当はあぶなかったのよと話せる妻の喜びが言外にある。

肌合いの違いさりげなく中座　小谷葉子

場違いの場所にいる自分を見出したときのバツの悪さ、肌合の違いとは面白い見方である。

影日向なく人妻の足きれい　武内雅堂

清潔で誠実な女性が下五に凝集されていて気持がいい。

もて余す心を月にみつめられ　栂みどり

悩める心は月からも星からも、明るさに背を向けようとする。

或日フトこれが倖かも知れず　楠貞子

本当のしあわせとは或いは、こんなものなのかも知れない。

土砂くずれここと思えば又あちら　江口渡

昔むかし口ずさんだ牛若丸の唱歌を踏まえて災害対策の遅れを痛烈に皮肉っている。

御亭主の浮気で今日も化粧せず　伊藤一郎

お化粧どころではない気持は分り過ぎるほど分る気がするが、反対にこんな時にこそ美しく化粧した方がいいと思うのは男の身勝手であろうか。

晴読の机　会釈も無く拭かれ　原田輝親

年寄りの遺瀬無さというようなものが自然に出ていて哀感がある。晴読とは晴耕雨読の逆の場合を指すと思われるが、これは作者の新語であろうか。

ATLAS

アトラス

高級洋菓子・レストラン

本店　洋菓子部TEL (33) 9974
レストランTEL (21) 2334

川柳五十三次（二十四）

富士野鞍馬

51 石部

石部は、水口から三里十二町（一三・一キロ）お芝居の「桂川連理柵（れんりのしがらみ）」お半長右衛門で知られている。

京都柳馬場押小路、帯屋の養子長右衛門と隣家信濃屋の娘お半と、伊勢参りの帰りに、石部の宿で泊り合わせ、そこで情交ができ、お半は妊娠してついに二人は、桂川へ投身心中するというのである。

石部金吉にしては居ぬ長右衛門　木刈（八〇22）

金吉で居ればいいのに長右衛門　鍋蔓（一二九4）

帯屋をといてしなのやとおちやつぴい　礫川（八七15）

草臥た足長右衛門の尻へ上げ　野萩（一三八43）

長右衛門お半がつぼにくらひ込み　花丸（六二12）

井伊夢を見たと石部の片はたご　三輔（八二27）

喰過て信濃屋腹へ帯をしめ　善光（八四14）

と、川柳もその石部の場を詠んでいる。

広重の石部の絵には、目川の里を描いたのがある。目川は石部と草津との間の村で、「名所図会」に、

「目川とは村の名なれど、今は名物の菜飯に田楽豆腐の名なり。襲ひて何国にも目川の店多し、豆腐百珍の一種となるもかれが全盛なるべし。」

とあって、目川は土地の名であると共に、菜めし田楽の別名となっていた。この風味を真似て、江戸浅草に女川の菜飯というのがあった。

あすの菜は女川の里の小夜きぬた　逝茂（八一5）

なめし鏈丁度女川が御小休　株木（一一八5）

という川柳がある。

52 草津

石部から二里二十五町（一〇・六キロ）で草津である。ここは東海道と中仙道との分岐点で、いわゆる追分である。

草津の名物は、うばが餅で、広重の絵も、このうばもちやを描いてある。

評判は馬迄這入る乳母が餅　三朝（一三三18）

姥が餅馬で乗り込む三度笠　風松（一一二29）

姥ケ餅草津が宿は地にかなひ　英雅（八四16）

餅までが名の広くなる乳母が店　玉丸（九一8）

と川柳も、うば餅を詠んでいる。

姥が餅の店は追分のところにあって、馬に乗ったまま店へ入れるような大きな家だったが、昭和二十九年につぶれ、今は国鉄草津駅前にあり、昔のかまどと看板が保存されている。

ここからは琵琶湖が見え、次の大津へ行くのに、矢橋（草津市内）から湖水を舟で渡るのと、瀬田の唐橋を渡って行く陸路とあったが「急がばまわれ瀬田の長橋」という俚諺がある。

翌京と言ふ近江路の心持　（武三12）

創刊号あれこれ

不二田一三夫

昨年10月号に〝番傘〟〝川柳雑誌〟〝ふあうすと〟〝川柳塔〟4誌主幹の創刊のことばを抜すいして書いた。その時、今年は、川柳塔創刊前夜のことなどを書くことにきめていたので、この二月ごろそろそろ資料を整理しておこうと思いながら、なにげなく手元の新聞に目をおとすと、第一面の広告に〝週刊小説〟の創刊号が出ていた。

そこで、十月号の原稿締切までに、どれくらい創刊号がとび出すか、ちょっと興味をもったのである。

〝性教育研究〟これは季刊創刊号。〝いんなあとりっぷ〟創刊号。〝WOO〟これは海外コミック専門誌。〝SMキング〟〝児童文学1972季刊1号〟〝THEカップル〟。

このほか一月号の〝面白半分〟創刊号（これは発行所へ注文）と、昨年八月に創刊した〝噂〟は谷垣史好氏からいただいた。

映画誌、旅行誌などの創刊号は四誌見送った。

新聞広告に出たものだけだから、まだほかに出ているだろうが、創刊号蒐集をもっと早くからやっておけば、読んでもらえるようなものが書けたかもしれない。

〝キング〟が創刊したのは五十年くらい前だったように思う。そのページ数と内容から五十銭では安い雑誌だった。表紙の絵もおぼえているし、吉川英治氏の処女作？〝剣難女難〟が楽しい連載物だった。まだ小学生のころだったが、鐘巻自斎とかいう豪傑が好きだった。

創刊号とは関係ないが、立川文庫ほかから、真田昌幸、幸村、大助の三冊と、その十勇士の本を集めたことがあった。猿飛佐助、霧隠才蔵、三好清海入道、由利鎌之助、根津甚八、穴山小助、海野六郎、望月六郎、筧十蔵の九冊は苦心して本棚へ飾ったが、三好伊三入道だけはなかなか入手できなかった。だが学校をサボり本屋を片っ端しからさがし回わったかいあって、やっと真田十勇士を勢ぞろいさせることに成功したのである。それにしても、いまペンをとって、その十人の名がスラスラと出るのは、あのころよっぽど本さがしに執念をもったのであろう。

本棚の上の段に真田三代、その下段へ十勇士をならべ、それが小学生時代の大きな自慢だった。それをオヤジが仕事や女のために失敗するたびに夜逃げするため、いつのまにかこの宝物がなくなってしまった。今にしておもえば残念なことをしたものである。

道頓堀松竹座の第一回プログラムを今だに保存しているが、おそらく本邦唯一無比のものだろうと自負している。この話をして、表紙の色や、その時の映画、エミール・ヤニングス主演の〝ファラオの恋〟をピタリと云いあてたのは、秋田実先生ただ一人だった。

小松園氏の〝劫火連作〟千日デパートの前が〝大阪歌舞伎座〟だった。このこけら落としの番付けもある。これを持っている人はいるだろうが、その前身だった〝楽天地〟のプログラムを持っている人はすくないとおもう。田中絹代が琵琶少女歌劇に出演していたころだから、これも五十年近いものである。

劇場や映画のプログラムの創刊号にまで飛躍してしまったが、創刊号が印刷所から届けられると、思わず両手をズボンで拭いて、そっと産まれ出た子を抱くように手にする。この瞬間だけは嫌いな酒でもグイと乾杯とやらをやらかしてみたいほど感激するものだ。

私のメモ

吉田水車

本誌八月号での「川柳と将軍と兵」を興味深く拝見。多少のゆかりもあるのではなかろうかとおもい、私の在満当時のおもい出などを一寸記させていただく。私の居た奉天での住居の前を向って右へ行った角が「千羽鶴」と言うキャバレーで、元の川雑同人岩崎柳路氏の経営によるものらしかったが、当時はすでに氏も奉天を去られていた。そして又左へ行った端の家が樋渡氏と申す退役陸軍大佐殿であった。氏は乃木将軍の副官であられた由、氏のことについては宿利重一著「乃木希典」の中にも見られる。氏はまた天保銭組—天保銭とは陸軍大学卒業の将校が胸におびた徽章が天保銭の形によく似ているところからこの名が出た—で将来は将軍を約束されたが惜しくも従軍中野砲の側にいて耳を痛め退官のやむなきに至られたとのことを伺ったことあった。乃木さんのことのついでに、私は在満中旅順の戦跡を二度訪問することが出来た。何と申しても、あの二〇三高地の頂上の当時ロシヤ軍のたてこもって居た砲塁は実に立派なコンクリート造りのものである。この銃眼からこぶし下りに射ったのが機関銃であったので、行くほどの日本軍は文字通り将棋倒しに射ちまくられて、幾度かの総攻撃もいたずらに死累を築くのみで、さすがの乃木将軍も三嘆を久しくされたものであった。この乃木三軍に少尉として、また連隊旗手として参戦されたのがその著者「肉弾」でも勇名な桜井忠温少将であった。私は幸い話は古いが、昭和十年三月九日大阪朝日新聞社が主催した「日露戦役三十年記念講演会」の折、桜井少将の講演を聴く機会を得て間接ながらお目にかかることが出来た。

因に、日露の役中何れの戦いにでも悩まされた機関銃は、当時の日本陸軍にはなかったので分捕品を参考にして急拠製作したとのことである。

そと拾う小石も紅し爾霊山　水車

▼第十五回近県川柳大会（竹原市）に出席した菊沢小松園副理事長（左）と、小浜牧人氏。

愉しき哉　高野山

—どんぐり・あすなろ・合同吟行

谷垣史好

夏休みが終っても週末の高野山は、ケーブルもバスもぎっしりと満員であった。数日前から残暑がぶり返し、山上に着いても上衣を着ていると汗ばむほどである。ここで和歌山の太茂津さんが合流、総員三十三名が勢揃いした。

どんぐり、あすなろ、まるべに——好郎先生を師と仰ぐこの三つの川柳会は、毎年合同で吟行し、親睦を深めてきた。これまでは宝塚、箕面、あやめ池と、いつも日帰りであったが、ことしはひとつ豪勢に一泊旅行をしようやということになった。〃高野山はどうや雑魚寝もええぜ〃と云い出したのは好郎先生であった。

残念なことに、まるべには新婚早々の女性が多く、泊りがけはどうも、ということで不参加、女性の少ないどんぐりと、あすなろだけでは色気のない吟行になりそうだなと心配していたのが、これは杞憂であった。

〝好郎先生の人気か、はたまた高野山の人気か〟（薫風さん）、冨柳会から柳太氏はじめ花梢さん、美代さん、弥栄子さん、維久子さん。南大阪からは文秋氏があいきさん、君子さん、智子さん、静香さんら一統を引きつれて参加、本社の葉子さん、羽曳野の可動さんも加わるという賑やかさ、三十三名のうち十四名が女性という嬉しい吟行となったのである。

九月二日、午後一時五十分ナンバ発特急で出発、途中変ったおはなしもなく、午後四時宿坊の遍照光院に到着。西いわを先生が、この住職とじっこんで、何かと便宜をはかってもらったのだが、大広間のほかに、女性専用の部屋がとってあり、おかげで楽しみにしていた雑魚寝が実現しなかったのは、まことに心残りであった。

夕食に精進料理をいただいて、夕方七時半から酔々さん司会で句会。花梢さん寄贈のウイスキーが大分入ったのか吸江さんの披講はいつもにない名調子。開け放った窓から、時折、さんざめきの声が聞えてくるのも、旅先らしい風情である。

好郎先生が「吉野山散るちようことも教えられ」「案内人聞いているかとも云えず（吉野山にて）」という路郎師の句を引用して、吟行雑詠をつくる心構えを話される。日常生活では得られない題材を発見すること、前書きがなくとも分り、前書きがあれば一層よく分る句でなくてはならないこと――これからの吟行に参考になるいい話であった。

海抜一千メートルの高野山の朝は、さすがに冷えこみがきびしい。翌三日も快晴、陽が上るにつれて今日も暑い。ガイドさんを雇って奥の院へ参詣する。本多家の子孫は男前が多い、と自称するこの中年のガイドさんが、まことに愉快。説明の最後にオチがつき、ユーモアに溢れた、その名案内ぶりに、約一里の道のりが、あっという間に終ってしまう。

奥の院へ近づくにつれて人出がふえ、足の遅いご婦人方は、ともすれば、はぐれそうになる。でも心配はない、可動さんがいる。どんな遠くからでも、彼の頭はひときわ高く聳えており、目標を見失うことはないのだ。

宿坊から観光馬車で一足先に奥の院へ来ていた悦郎さんは、もう二度と乗る気がしない馬がかわいそうだ、と云う。そういえば、年寄りの馬ばかりだ。〝どこで水を呑ませるのかしら〟と心配そうな奈々さん。みな心のやさしい人である。

この日に備えて歯の治療を済ませ、張切っておられた好郎先生は、終始ニコニコと、旅を楽しんでおられる。その姿を拝見しながら僕は路郎師の「古稀はよし弟子にまご弟子ひまご弟子」の句を思い出していた。

古稀はおろか、もっともっと長生きしていただいて、孫弟子やひまご弟子と一緒に、こういう吟行を何度でもやりたいものだと思った。最後に、各題、天の句を紹介しよう。

仲よしの中をへだてた指定席　奈々

出まかせの愛　肌で誤算感じ取り　弥栄子

子の夢が老眼鏡の空を飛ぶ　可動

邪心多く高野杉が眩し　史好

西出　一栄　著

「ねっくれす」

送料共　六〇〇円

急所

越智一水選

表情が 豊かで急所が つかめない　扇水
聴診 器急所 まで 来て 動かない　同
スタイルに自信があって子が産めず　同
急所 だけ はずして 叱る 父の愛　南奉
その急所にさわられ女コロリ落ち　七面山
ポケットの燐寸で逃さぬ急所つき　不酔
性のこと 急所はずして 教えとく　本蔭棒
痛かった 後で 気持の 良い 指圧　輝親
笑わせて 急所で 締める お 説教　伶人
取 調べ 急所に ふれて 黙 秘 権　同
急 所 を 衝けば 夫 は 男 なり　新之助
以心 伝心 急所に 触れる 能役者　古方
利きますか 按摩急所を 強く 揉み　杜月
その 昔 陸 の 急所 か 関 所 跡　同
閉会寸前急所を 突いた 質疑出る　春日
二日酔い急所をさけるコツを知り　潮音
冗談の ひとこと急所 さらけ出し　翁童
女房に 急所 あずけて いる 平和　弘朗
急所には触れずやんわり子を悟し　静泉
船頭は あじろの 急所 他言 せず　文三郎
据え膳を食った弱味につけ込まれ　利美
後継ぎと 決めた急所の 教えぶり　重人
やんわりと 嫁の 急所を つく 姑　敬一
僕の 急所 妻と 母とが 手を握り　英詩
金もうけの急所どけちに教えられ　どんたく
急所 つかれたか 社長どなり出し　同
何気ない 言葉に急所 くすぐられ　大輪
例えばの 話で 急所 ついて くる　同
かばうからそこに急所があると知れ　白汀
これこれが急所と二伸に書いてあり　豪城
消費者の急所くすぐるコマーシャル　智司
うかつにも敵に言われて知る急所　梁水
プロレスに手加減がある急所打ち　昌道
口べたはただ急所だけぐっと突き　好一
悪役の パンチ 急所を 又 ねらい　悠泉
やんわりと急所をつけばしゃべり出し　佳女
見習 いへ 社長の 急所 まで教え　鎮也
荒仕立 急所 外さぬ 腕 の 冴 え　恵子
女 秘書 社長 の 急所 も 心得る　和宏
急所に ふれると団交 はかどらず　暁明
反抗期 ずばり急所を ついてくる　同
老獪 は 急 所 掴んで 泳 がされ　宵月
急所 だけ やっと 隠した 海水着　松花
一と言が 急所 急所を 突く 税吏　昌道
人
仲人は 急所を ついて 承知 させ　国彦
地
お互いに知って急所をそらし合い　千翁
天
心得た 急所は 痛い とこを つく　祥月
軸
急所突く その末席は よくどもり

表向き

田中蛙眠子選

団地族 表面 だけの 見栄を 張り　恵子
表向き 墓 参 選 挙 の 票 集 め　輝親
表向き 報 告 会 で 票 を 寄 せ　新之助
立 候 補 芸 名 表 向 き に 出 し　章雅
表向き 転地 治療 という 離婚　宵明
表向き だけは 別れて まだ 続き　露杖
表向き 夫婦 にしとく 裏 二階　本蔭棒
手伝って くれているとは 表向き　木魚
夫婦と云うことにして危機を抜け　七面山
表向は 何もなかった ことでもめ　千翁
表向き 不問 に 付して 依 願 免　利美

日刊電波新聞柳壇（橘高薫風選）
応募規定―雑詠三句。締切なし。
宛先―〒530　大阪市北区中之島三ノ三
朝日新聞ビル六階、電波新聞大阪本社学芸係（川柳）

表向きの会議公式論ばかり　素身郎
表向き赤字再建とは云えず　保夫
定価表見せてセールス首かしげ　不酔
表面は叱って母は陰で泣き　和宏
表向き十八歳で制限し　国彦
奥座敷表向きではない話　国彦
表向き株主裏では総会屋　章雅
ホステスの姉の子と云う子を育て　カズエ
表向き通夜に行かれぬ人ひとり　文子
表向きにされては困る袖の下　春日
表向き微笑核心に触れて来る　豊生
表向き背伸びのつらい暮し向き　潮音
表向き給油といって基地に降り　どんたく
表向き自由価格という値上げ　伶人
出るとこへ出れば女も負けていず　思月
表向きこういうことにしときまひよ　古方
表向きどうあろうとも実をとり　翁童

佳

表向き共に涙を流しとき　白汀
大金庫でんと据えてる左前　里風
表向きのれんが重い三代目　豊平次
表向き赤旗振っていたスパイ　莢水
表向きにできない恥をいうて借り　悠泉

人

表向きだけは平和な日本の灯　代仕男

地

表向き魔性のカケラさえ見せず　古心

天

表向き飾って小役人が生き　弘朗

軸

表向きつくろう標準語にとちり

手ぐすね

小川恒明選

発言へ手ぐすね引いている代議員　弘朗
手ぐすねでよりをかけてる総会屋　敏
手ぐすねを引いて貧乏ゆすりする　扇水
手ぐすねが溜息洩らす俄雨　古心
手ぐすねの露店を泣かす空模様　本蔭棒
手ぐすねで待てば台風Uターン　好一
手ぐすねを引いて暴力バーが待ち　バット
手ぐすねで一座出番を待つ舞台　代仕男
手ぐすねを引いて一発勝負賭け　保夫
手ぐすねも独り相撲の当てはずれ　藤持
手ぐすねの張込み霧に耐えて立つ　敬一
手ぐすねを引いてたはずが丸められ　思月
手ぐすねを引いてた解禁雨となり　豊生
手ぐすねの腰を折られて妥協する　英子
開店へホステス口紅ひきなおし　素身郎
手ぐすねをひけばゴキブリ影みせず　カズエ
月賦屋が手ぐすねひいて待っていた　宵明
手ぐすねの割りに歯ごたえないテスト　英詩
手ぐすねの誤算手の内読まれてた　重人
顔見れば手ぐすねどこかへ飛んでゆき　綾女
手ぐすねへ金持喧嘩せぬと云う　里風
大物に手ぐすねの手がふとゆるみ　祥月
手ぐすねをさせて貫録見せにくる　木魚
手ぐすねの先がちらちら見え過ぎる　軒太楼
人間の世界さ手ぐすね又はずれ　古方
手ぐすねを引いてる筈が寝返った　隆子
手ぐすねは引いたが足が従いて来ず　杜月
手ぐすねにかけて鼻毛を読みはじめ　莢水
手ぐすねを引いてたわなわなかった　翁童
手をかしてやろかと手ぐすねからかわれ　白汀
手ぐすねをひくも天災には勝てず　菩句
笑う外なし手ぐすねひいただけでした　凡九郎

佳

手ぐすねへ欲求不満ひっかかり　宵明
手ぐすねの何か忘れていそうなり　奇童
手ぐすねにうっかりかかる失意の日　和宏
手ぐすねを引いてるとへころげ落ち　白汀
手ぐすねを引かれる程の金も無し　伶人

人

出る幕がない手ぐすねへ老いを知り　梁水

地

手ぐすねと知らずちょっぴり自惚れる　鎮也

天

手ぐすねの腕をほどけばねむくなり　英子

軸

さりげなくみせる手ぐすね汗にじむ

初歩教室

——題「朝」——

本田恵二朗

ふる里の朝土の香の中に佇つ　露杖
（土の香へ童心浮ぶ里の朝）
朝顔の濃い紫の露こぼる　同
（紫の露こぼれそうに朝へ咲き）
直すぐに朝の青田を風渡る　同
（おはようさんと青田へ媚びる朝の風）
目覚しに頼んでご来光見る予定　翁童
（目覚しの針にご来光おぼえさせ）
朝もやに別れを告げて鳴る気笛　同
（朝もやをかき消すように鳴る気笛）
今日もまたやり遂ぐ朝の深呼吸　静泉
（朝をぐっと呑み込んで今日をスタートする）
せせらぎに朝寝の床をゆさぶられ　頼次
（せせらぎが子守唄です朝の夢）
朝寝癖旅行日だけは早起し　つとむ
（早発ちへ日頃の寝坊がちゃんと起き）
朝起きは明治の母にかなわない　同
（朝を掃く明治の母へ薄暗い）
水さえ受けず点滴にたよる朝　貞祐
（点滴にたよる命へ朝白む）

午前四時早く白めよ呼べ雀　同
（朝の陽を早く呼んでよ雀さん）
工事場の朝は資材を運ぶ音　誓二
（工事場へ朝をもてくる鉄の音）
盛り場の朝は醜いボロを見せ　同
（醜悪な皺盛り場の朝の貌）
大漁旗はためき活気溢る朝　杜月
（ピチピチと漁港の朝が跳ねている）
巣立ちするように団地の朝を出る　同
貧乏な俺にも貧乏なりの朝　本蔭棒
（貧乏は貧乏なりの朝を持ち）
威勢よくカーテン朝の音であけ　同
（快眠のカーテン朝の音であけ）
夏の朝夕べ眠れぬ今まで寝　茶々坊
（寝不足が眠りこけてる夏の朝）
二日酔いけさは水だけ二三杯　同
朝の光り差込む窓に鉢をすえ　つね
（朝の陽が鉢のみどりに話しかけ）
古里は太陽海から登りだし　生仏
（里の陽は水平線で目を覚し）
早出してくれば忘れたことばかり　茂美
（早出番ネクタイ忘れて飛んで来る）
百度ふむ朝境内の寂として　好一
（百度踏む足朝露にいたわられ）
ピーヒョロと漁港の朝が明けてゆく　度
（鳶一羽漁港に朝をもって来る）
くまぜみが朝だ朝だとふれまわり　同
朝露を踏んで草刈る丸い背　静子
（朝露は草刈鎌の老いを知り）
朝顔に停年の夏を救われる　千夏
（停年の無聊朝顔にいたわられ）

朝星夜星今は恍惚の人　同
（恍惚の人朝星をなつかしみ）
夏の朝寝ころんで孫と絵本よむ　静観堂
（寝そべって孫と絵を読む夏の朝）
寝行儀をととのえ夏の夜明けかな　同
（寝行儀を整え朝を寝直す気）
夏の朝雀むらがり餌をせびる　同
（小雀に餌をせびられる夏の朝）
朝早く植木の手入れまた楽し　秀村
（歯ブラシのまんま植木に話しかけ）
朝早く犬の散歩に家を出る　隼人
（犬の歩に合せて今朝も露を踏む）
朝まだき牛乳新聞が夢を切り　藤持
（新聞少年朝寝の夢を切ってゆく）
湯の宿で庄助さんになるつもり　比呂路
（宿浴衣庄助さんをきめこんで）
朝刊のチラシ老妻見逃がさず　同
（朝刊のチラシへ妻の目が光り）
小商人朝の初客だいじがり　同
露の間の朝顔やはり夏のもの　まさひろ
（東の間を朝顔しっとり露に濡れ）
お祝いの朝酒ほんのり照りており　陽山
（朝酒へ妻もほんのりうれしい日）
朝散歩逢う人毎に気が晴れて　同
（朝すがし笑顔蒔き蒔き散歩する）
朝早く寝ござの冷えに目を覚し　満津子
（朝冷えが寝ござにそっとしのび寄り）
朝抜きで痩せるつもりの目がくらみ　露芳
スモッグの無い朝大きな深呼吸　保夫
一日中朝の気分で暮らせたら　繁子
今朝もまた雀と一緒に起き達者　濁水

朝顔に息を吹き込み木を副える　ますゐ
ラジオ体操が時計にもなる夏休み　志津
屹度来る朝を信じている眠り　凡九郎
味噌汁が煮こぼれ朝が活気づき　豊生
マンションに独り女のおそい朝　慶彦
牛乳と新聞朝を配り合い　重人
朝刊へ期待の株がさがり気味　カズエ
朝食を抜いてスタイルもちこたえ　同
茶柱がうれしい朝の足にする　同
朝風呂でもてたゆんべをひやかされ　利美
二日酔だしに朝から迎え酒　同
日本人たるを忘れた帰日談　同

題―無―十月二十日締切（十二月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井三五二㊐七一一
本田恵二朗

第一回 小松川柳大会 出席の記

橘高薫風

九月二日（土）快晴、大阪駅で待ち合わせた八木摩天郎、岩本雀踊子、河合武雄の三氏と私は急行アルペン一号で一路小松へ。到着後早速に清水白柳さんの墓前にぬかずく。若むした風格のある墓石の並ぶ墓地だった。第一回の小松川柳大会だ。白柳さんは墓を揺り動かして出席したいことだろうと思った。後刻かけつけた河内天笑氏も翌朝、参拝された。次いで順天熊野神社にある山上千太郎氏の句碑へ。千太郎氏をまじえて記念撮影、立派な自然石で台石も良い。

心の詩句帳を埋めて今日に生き

千太郎氏の句はお人柄がにじみ出ている。伊藤茶仏氏とともにこまつ川柳会の一本柱だ。浅野芳朗・四方天弘美・村井城南・吉田秀哉諸氏が四天王、チームワークがゆるぎない。城南氏が健康をそこねておられたが、速かなご快癒をお祈りする。宿舎は粟津温泉の法師、千数百年の由緒のある宿だ。上田六文銭の金子呑風氏、柳都の大野風柳氏らが相次いで見える。

さすが第一回大会らしい大物の顔々。でっかい錦鯉の背に北陸の夜が更けて行った。翌日午前十時に会場の市公会堂へ。受付けに美しいお嬢さんがずらりと七、八名。若い。選者は、高木鈴の家、山田良行、森下冬青、河崎幸太楼、西田自然人、橋本沐人、伊藤茶仏のベテラン諸氏。対称的だ。ベテラン選者に、若い力を伸ばして下さることを願う気持で一ぱいだ。こまつ川柳社はきっとそうなるに違いない。

本社からの八木摩天郎氏は席題柱の共選を担当された。摩天郎氏は地位、雀踊子氏は天位、天笑氏は天・地・人位を総なめに獲得、総合得点で、第二位を、薫風は第五位を得た。賞品授与ではきらびやかなカップや桶が次々と受賞者に渡された。

第一回の歴史に年毎に箔がついて賞杯に深い栄光のますことだろう。こまつ川柳会を背負う次代の作家が手中にする大きな新人賞の桶が私には特に印象的であった。

（写真は句碑と山上千太郎氏）

第二百五十五回（四十七年度第九回）

大萬川柳

「糸」

入選発表

選者　川村好郎
投句総数　五百五十句
入選　五十八句

堺　一二三

失業の釣糸淡しく見られ　大洲　暁明
こっそりと釣れた隣りへ糸を垂れ　大阪　万里
毛糸編む無心の顔にかげりあり　宝塚　静馬
つながらぬ糸に家裁も匙を投げ　東大阪　弥生
時を待つ女未練の糸切れず　倉敷　梁水
ミシン糸もつれて妬心見透かされ　堺　青香
目に見えぬ糸あり親子たぐり寄せ　大阪　文秋
凧糸の夢ここまでという長さ　島根　芳子
糸づくりまで悠々と泳ぐ鯉　神戸　牧人
蜘蛛の糸もがけばもがくほど絡み　倉敷　克枝
糸よりも細い絆をただ信じ　鳥取　豊生

岡山　川端柳子

毛糸玉ぐんぐん夢を編みいそぐ　倉吉　弘朗
糸のカセ僕が持ち役妻が巻き　神戸　どんたく
もつれ糸ほぐす根気でくどきはり　今治　宵明
まぼろしの糸に人生あやつられ　和歌山　太茂津
しつけ糸炎える想いを縫いあげる　倉敷　千翁
燃えるまま糸にふるえている音色　倉敷　恵二朗
絹糸の不満木綿を縫わされる　大阪　痴亭
後ろから糸ひく妻を意識して　富田林　美代
釣糸も静止している冴えない日　大阪　一栄
おだてたら糸切れるまで上る凧　鳥取　豊生
傷心のほつれ繕う母の糸　大阪　水客
団体のひとりが持っていた針と糸　八尾　酔々
糸屑をさりげなくとる片思い　大阪　章雅
針に糸妻老眼を気付いてず　大阪　新之助
音痴にも恥をかかさぬ三の糸　倉敷　扇水
針に糸通る自慢をけむたがり　大阪　阿茶
細くとも糸を切らずに五十年　藤井寺　吸江
繭の糸日本文化の意気を吐く
抜糸した背見せ合うも療養所　大阪　克美
抜糸したとたんいつから飲めますか
針糸を通せぬ母に老いを知り　大阪　智子
三億円糸口もなく忘れられ
幸せな糸振り袖を縫うている
糸の色揃えて嫁ぐ日も近い　松江　通児
見当はおよそついてる蔭の糸
一瞬は雑魚らしからぬ糸の張り　倉敷　里風
切れそうな糸をたぐっている未練
糸垂れた手応え手形など忘れ
想い出の糸をたぐれば傷に触れ　富田林　弥栄子
人妻の糸はきれいに燃えて切れ
一筋の愛もろもろの糸を断ち
もつれ糸心に鋏しのばせる　富田林　花梢
たぐり寄せれば結び目のない縁
糸のよな縁に金婚たどりつき
もひりの俺にほぐれる釣りの糸　大阪　修史
今日の糧縫う糸尻りの糊しかと
出稼ぎの帰り待ってる仕付け糸
糸尻りの糊を忘れたような人
回想の一コマ亡妻のしつけ糸

佳句

富田林　花梢

指人形糸のさばきにみる悲恋　富田林　美代
縦横の糸に女の業をみる　松原　史好
糸切れた凧にも似たる青春よ　大阪　水客
しつけ糸とる嬉しさは母のもの　香川　酔夢
糸くずの中で綴った母の詩

人ノ句

倉敷　恵二朗

つづれ織糸と糸との和に生きる

地ノ句

香川　酔夢

嫁としていまだに解けぬ糸を持つ

天ノ句

倉敷　克枝

運命の糸しっかりと素手で持つ　選者吟

ひと目には見えぬわが家のもっれ糸

昭和四十七年度　ベストテン（八月現在）

一	里風	一五、五	倉敷
二	吸江	一五、〇	藤井寺
三	弥生	一四、〇	東大阪
四	克枝	一二、五	倉敷
五	修史	一二、五	大阪
六	天笑	一二、五	堺
七	花梢	一二、〇	富田林
八	酔夢	一二、〇	香川
九	芳子	一一、五	島根
一〇	美代	一一、〇	富田林
一一	千翁	一一、〇	倉敷
一二	太茂津	一一、〇	和歌山
一三	英詩	一〇、五	呉
一四	水客	一〇、〇	大阪
一五	梁水	一〇、〇	倉敷
一六	弥栄子	一〇、〇	富田林
一七	智子	一〇、〇	大阪
一八	可住	一〇、〇	兵庫
一九	遥児	九、五	松江
二〇	牧人	九、五	神戸
二一	一二三	九、五	堺
二二	新之助	九、〇	大阪
二三	重人	九、〇	大阪
二四	之保	八、〇	大阪
二五	白水	八、〇	岡山
二六	静馬	七、五	宝塚
二七	筒子	七、五	倉敷
二八	静泉	七、五	鳥取
二九	葵水	七、〇	和歌山 以下略

昭和四十七年度第十一回

「蓋（ふた）」五句以内

締切　十月二十日

四十七年度最終回

「あと味」　五句以内

締切　十一月二十日

投句先

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

郵便番号五四二川柳塔社内

大萬川柳係

喫茶店が勉強部屋

小谷葉子

喫茶店でないと句が作れない私。そんな私は月のうち半分は不二田様のお供をして社の帰りに喫茶店へ寄ります。

真夏は、からだが冷めたくなるまで不二田様は喫茶店で休まれます。ここでいろいろ勉強させていただきます。

「このごろスランプか、句がすこしも作れないのです。不二田様もスランプがありましたか」

「そんなのないね」

「だけど、どなたに聞いてもスランプはあると云われますけど」

「ぼくはそんなの、感じたことがない」

「でも本社句会で、三句ぐらいより抜けないこともあるのでしょ？」

「それはスランプではない、仕事が忙しすぎたからさ」

「……」

「スランプなんて、自分で勝手にきめてるんだろ、そんなコトバの魔術にひっかかっていては、一生という長丁場は走れないよ」

不二田様はノイローゼにもかかったことがないそうです。二、三年前までは本誌のほかに〝漫才〟誌の編集と放送局や新聞の原稿などで疲れきったお顔にこちらがハラハラしたものでした。

「ぼくは、一つずつモノが片づくと、スグすべてを忘れてしまうクセがあるので、ノイローゼなんかにかからないね。生まれつきノンキ坊主でバカなんだろうナ」

なかなかどうして、不二田様は他社の人も認めるほど川柳塔社の知恵袋です。

私は不二田様にいろんなことを喫茶店で学びました。社にいる時は仕事、仕事ですから、ロクにお話もしません。電話でも不二田様は用件だけで、時間を大切にされます。しかし私の場合はどうしても話が長引きます。「長い話だったね」ときどき不二田様のご自宅から電話がありますが、待つのにイライラされるそうです。三分間あれば原稿用紙三枚分しゃべれるそうです。こんなことも喫茶店教室でおそわりました。これからは三分間電話を実行しようと思っています。

美しい水彩画入り

古方手書き句集

送料共　八〇〇円

・柳界展望・

白柳さんの蕉前で、左から薫風・摩天郎・茂雄・雀踊子諸氏。

（橘高薫風担当）

▼川柳塔社47年度二賞発表句会と同人総会は十月八日午後三時から道頓堀自安寺で開催。

▼麻生葭乃先生は、お達者で、折に二三日西村梨里さんのお宅へ灸をすえに行ったり、気儘にお暮らしのご様子である。

▼苗木三十二号で柿沼考人氏（与野市）は、川柳さっぽろ七月号、川柳噴煙五月号、観光川柳七月号、川柳ジャーナル六月号などの記事を引用、「全日本川柳作家協会」（仮称）設立の気運が表面化して来たと強調された。

▼川柳なごやは九月号で通巻第四百号。川柳宮城野は三百号発行。

▼若本多久志氏（西宮市同人）の左ききブームは新聞に放送に社長業より多忙。

▼山路星文洞喜寿金婚祝賀記念句会は十月十日午前十一時から台東区立区民会館で開催。兼題、最良の日・多趣味・内助・火山・気楽・鶴・当って砕けろ・秋の風物詩・三味線・虎の巻・翌る朝・上野駅・野暮・痛し痒し、各題三句、投句は出席者に限る。

▼第二十三集「吉備団子」の原稿が募集になっている。申込みは自選十句に郵便番号、住所、氏名（雅号）、年齢、職業、電話を記し、参加費五百円を添えて十月末日まで〒七〇〇岡山市津島、岡大官舎H3—7川柳岡山社内、吉備団子編集係宛。

▼光明園川柳大会（岡山県）は十月二十二日（日）邑久町光明園で開催。

▼昭和四十七年度岡山県芸術祭第七回岡山県文学選奨、川柳の部（十句）が募集された。締切は九月末、発表は十二月初旬、審査員は逸見灯竿、浜田久米雄両氏。

▼白石朝太郎氏の出版記念会が九月十七日正午から新津市のホテル美好で開催され、著者との懇談の席が設けられたが、川上三太郎、吉川英治諸氏らと親交のあった著書の懐古談は好評だった。

▼第八回山陰川柳大会は九月十七日（日）午前十時から鳥取県東伯郡東伯町中央公民館で開催。本社から若本多久志氏が出席された。

▼第六回串かつ川柳大会は十月二十九日（日）午前十時から呉市総合福祉会館大ホールで開催。兼題、スピード・問題・浅い・粗品・計算・続く・微笑・欲望・辞退・訪れる、席題三題、各題二句、投句は縦二十三糎、横四糎の句箋を使用、二百円を同封して十月二十日までに〒七三七呉市本通四丁目六の七串かつ川柳会宛。

▼かがみ川柳会句会は十一月二日夜池田古心居で。兼題、ぼんやり・旧姓・終点

▼番傘川柳つくし会十周年、青木三碧句集「大陸」発刊記念川柳大会は九月十日（日）正午から新和歌浦観光ホテルで開催。

▼第一回小松川柳大会は九月三日（日）午前十時から小松市公会堂で開催、八十余名の出席で盛会だった。

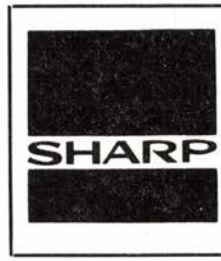
▼第十五回近畿川柳大会は九月三日（日）午前九時から竹原福祉会館で開催された。二百名を越す参加者で極めて盛会、本社から菊沢小松園・垂井葵水両氏が出席選を担当、小浜牧人・高杉鬼遊・板尾岳人諸氏が同行され、長野文庫・月原宵明・中村九呂平等遠来の諸氏と歓談された。

▼どんぐり・あすなろ合同高野山吟行は九月二日三日の両日三十余名の参加を得て遍照光院で開催。殊に十五名の女性の出席は圧巻であった由。

▼川柳東京の発行所は東京都杉並区南荻窪二の二四の一一東京番傘川柳社。

▼菱田満秋氏（横浜同人）は八月十四日松島から旅信。

▼さきに「ごだやら人生」を世に出した川柳漫画の石丸弥平氏が、十二月刊行予定で、みどり新書の会（〒990山形市緑町二の四の六）から「雪国の覚え書」を刊行される。漫画家のユニークな書下し小説である。一



誠意と技術で
世界のために
シャープ株式会社

読をおすすめする。定価五百円、送料八十円。予約は東京都板橋区小茂根四の十二の十四石丸弥平宛。

▼合同句集「銀鱗」が、七月二十日青森市本町五の五の十一津可呂川柳社から発行された。伝統ある歴史の川柳王国青森の一城の主八名が名を連ねている。序は重鎮西谷みさを氏の筆、B6版百七十頁、非売品である。

神手津王
度忘れの名を思い出すア
ドバルーン
魚水を得たり愚弟のモー
ニング
杉野十佐一
集魚灯はホステス烏賊は
すみを吐き
戸惑ったように枯葉がへ
ばりつき
伊藤酔車
マンホール人が出てきて
今日終る
旅客機をじっと待ってる
サングラス
村越大峨
頭から水浴び覇気を呼び
戻す
石だたみ濡れてお寺に妻
と行き
石沢三善
型通り下宿の娘と結ばれる
中年になって講習身が入
らず
伊藤桐夫
関東の緑が匂う水戸あた
り
バス同士身をくねらせて
すれ違い
松尾夢城
風は秋ガスの炎に似た女
米量る時百姓の目ではな
し
田沢良太
日本酒の方を酌がせたお
嬢さん
ふるさとの子らに幼き我
が姿

▼時の川柳誌上句会募集
第二回募集
「端」—鈴木　可香選
「濃い」—山内　静水選
「雑魚」—橋高　薫風選
「レール」—伊藤　勢火選
「雑詠」—田中　秀果選
〆切　十月末日
第三回募集
「秘密」—池田あや子選
「握る」—坂根　寛哉選
「資本」—森　紫苑荘選
「家族」—去来川巨城選
「雑詠」—小松原爽介選
〆切十一月末日
・各題三句、必ず別紙のこと。投句用紙一題ずつに記名のこと。
・投句料、各回百円（切手も可）
・賞品—総合得点十位までの方に楯ならびに東洋樹主幹の短冊を贈呈します。
・宛先には必ず「誌上句会係」と表記のこと。
〒652神戸市兵庫区神田町四〇時の川柳誌上句会係

▼田中蛙眠子氏（鳥取市同人）は自治体病院の事務長として、または西伯町史の編さん委員として忙殺されの川柳に親しむ時間がないとの由。

▼中島小石さん（本社）は八月二十七日、日立ホールで小川流清流会の舞踊「老松」と「空ほの」を舞われ好評だった。

▼不二田一三夫氏は新関西新聞へ「緊縛少女剣劇」（読切小説）を執筆。

▼小幡里風氏（倉敷同人）は足の怪我の余後も漸次良好で医師の話では十一月頃には跛をひかずに歩行可能とのこと。

▼川端柳子さん（岡山市同人）は二月に肉離れがして症状逆戻りになったが、最近家事にも手がつくように なられた。又、川柳道場の兼題茶で天位を獲得、「ふとここにいるしあわせの番茶くむ」地位は小野克枝さん「情もろい女が苦い茶を入れる」

▼小川静観堂氏（伊丹同人）のお招きをうけ有信新之助氏と薫風は八月二十日（日）京都山科のわらびの里へ。閑静なたたずまいの料亭で半日の歓を尽くした。

▼南海川柳会は十月十九日午後六時から、題は—守衛室・変身・自慢—会場は南海電鉄本社食堂内。

▼南大阪川柳会は十月二十日午後六時から、題—体力・輝く・茶碗・正体—会場は松崎町二丁目以和貴荘。

▼川柳東大阪は十月二十八日午後六時から、題は—足跡・鶴橋・指図・レッテル—会場は永和駅前市民会館。

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

本社 九月句会

会場　以和貴荘
七日　午後六時

ミュンヘンオリンピックに殺人ゲリラが出現、へんな記録が樹立。ここ以和貴荘は柳翁忌とあって正に平和の祭典だ。

柳話はご存じ舌の魔術師吉田圭井堂氏久々のご登場である。題して「明治生まれの見た今昔の世相」明治生まれどころかフレッシュな感覚にユーモアをミックスさせ、現代を皮肉るあたり会場をわかせにわかす。

初出席の清女さん、新人静香さんの堂々天位。名手花梢さんが月間賞にかがやく（F）

出席―新之助・与呂志・古方・千万子・幸太郎・たかし・太茂津・柳志・史好・滋雀・肖二・綾女・儀一・百合・一三夫・静馬・緑水・凡九郎・好一・竹荘・花梢・多久志・圭井堂・文秋・瓢太・百酒・野迷路・一舟・洋敏・いわを・金三・静歩・柳宏子・三十四・悦郎・静々・葵水・天笑・重人・敏・葛城・吸江・形水・南柳・柳信・庸佑・牧人・維久子・清人・トメ子・茂美・いさむ・祐司・岳人・六龍子・頂留子・清女・静香・小松園・弥生・鬼遊・栞・一二三・あいき・薫風・葉子。

（河井庸佑整理）

席題「台風」　　水谷竹荘　選

台風の　前ぶれパン屋の　パンが売れ　静　歩
台風へ　七つ　道具を　出して　来る　静　歩　いさむ
台風へ　飯場　横木で　支えて　る　幸太郎
お茶の間をジリジリさせるのろ台風　弥　生
折角の　一泊　旅行　へ　来た　台　風　圭井堂
当てにせぬ　気象　台だが　聞く　進路　重　人
台風の　心が　知りたい　ある日　ふと
台風に　冷　戦　夫　婦　板を　打　ち　静　馬
台風に　振り　回されて　いる　非　力　文　秋
必需　品　提　げて　台風　待つ　姿　勢　維久子
台風の　ように　暴れて　孫は　去に　瓢　太
台風に　パパ　の　貫　禄　見　直　され　静　馬
土　建　屋　は　台　風　来　の　皮　算　用　たかし
台風の　予報　こん度も　呆けて　くる　花　梢
風鈴　が　まず　台風を　先に　知り　酔　々
家買うて　豆　台風にも　おどかされ　重　人
台風シーズン　大工仲々　来て呉れず　滋　雀
台風の　真ん中　子　等　の　退　社　時　静　香
台風がテレビ　おどして　通り　過ぎ　三十四
無駄　金で　ないと　台風に　教えられ　一　舟
台風は　外れて　呉れろと　わらべ　唄　肖　二
台風　も　番　号　順　に　モタ　つかせ　多久志
三日後　来る　台風　に　気を　もませ　吸　江
台風の　予報　へ　一家　身が　まえる　静　香
台風が　手抜　工事　を　見逃　がさず　一　舟
台風　を　一　番　知ってた　窓　の　鉢　太茂津
台風へ　日曜　大工　の　腕　を　見　せ　三十四
コンピューターの通り台風来ゝれず　柳　志
台風へ結　婚　式　の　待った　無し　儀　一
台風を　長距離　電話で　見舞　われる　三十四
台風　の　進路　へ　日　本　錬えられ　肖　二
台風　など　構うてられぬ　式日取り　祐　司
台風が　都会　の　空気　入れ　替える　文　秋
台風に　犬小　屋　餌さを　忘れ　られ　一三夫
台風一過おばはん泣いてけりがつき　与呂志

堀江正朗還暦祝賀川柳大会

時　昭和47年10月15日午前十時開場
場所　木次町　体育館二階和室
題と選者　杖（橘高薫風）酔う（尼緑之助）
友情（木村三雷波）頑固（岡崎祥月）妻（藤井明朗）握手（堀江正朗）三句宛。
投句のみの方は各題別紙、住所氏名明記
投句料二百円（切手可）投句は10月10日まで。会費千円（会誌、写真代、昼食、懇親会費）出席者には薫風氏揮毫の記念手拭、兼、席題共秀句に選者短冊贈呈。―島根県大原郡木次町新市中　むらくも川柳会

台風に　あばかれ　人災　さらけ　だす　綾　女
台風の　見　舞　忘れた　頃に　来る　清　女
台風　接近に　一家　揃って　身構える　竹　荘

席題「負け惜しみ」　　城　一舟　選

負け　惜しみ　言　わず　女は　涙　ぐみ　肖　二
負け惜しみ　捨てて　男子として握手　悦　郎
よりもどすチャンス逃がした負け惜しみ　花　梢
借りる処いくらもあると言うて借り　清　女
負け惜しみ　言うて知識の　底が知れ　文　秋
気まずさを声でごまかす負け惜しみ　静　馬
負け惜しみ言うて筆まめ詫びている　弥　生
年寄に　花を　持たせた　負け　惜しみ　牧　人
結局は　ぐちになってる　負け惜しみ　重　人
ふったとはふられた方の負け惜しみ　鬼　遊
負け惜しみ　数字はっきり　表わされ　いわを
負け惜しみ　並べてさめた　酒の酔い　いさむ
左遷　から　空　の　青さを　自慢　する　柳　志
負け惜しみ　口に出す子で　安堵する　柳　信
末っ子が　廻わらぬ舌で　負け惜しみ　与呂志
負け惜しみ　社会が悪い　ことにする　多久志

負け惜しみパンタロンならにあいまず　敏儀一
負け惜しみ言わぬ社長のやつあたり　天笑
しまいまで言わせてやった負け惜しみ　柳志
カロリーが無いと松茸買って来ず　滋雀
クーラーはからだに毒とまだ買わず　悦郎
ひと言の罵声で消えた負け惜しみ　文秋
腹の中見られてしもた負け惜しみ　綾女
口惜しさが顔に出ている負け惜しみ　天笑
負け惜しみも笑顔で言える年の功　たかし
またひとつ嘘をつかせた負け惜しみ　静馬
負け惜しみ程度を越えて馬鹿にされ　葛城
大声で寝言まで言う負け惜しみ　弥生
まだ駒を握ったままの負け惜しみ　梢花
負け惜しみひと言過ぎて眠られず　舟一
生きていく今日の支えの負け惜しみ
負け惜しみなどと税務署見てくれず

席題「洋モク」　野村太茂津選

商談はまとまり洋モクくゆらせる　維久子
洋モクの余分へ税関の目が光り　維久子
マニキュアの指が洋モクもてあそぶ　柳信
上いじりの一生洋モクの味知らず　三十四
赤い爪もう洋モクに倦いた顔　千万子
洋モクを女無理したなと思い　儀一
洋モクのピンとキリとが判りかね　天笑
洋モクを喫わせて聞かす外遊談　新之助
客先で出す洋モクを別に買い　柳宏子
洋モクはたんすの隅にのけたまま　静歩
ヒゲ剃って上陸用のバージニア　柳志
洋モクを吸って気分を変えてみる　庸佑
洋モクを吸ってアロハが板につき　柳信
戦争が洋モクの味覚えさせ　幸太郎
灰皿へ吾れ洋モクと言う威圧　六龍子
洋モクをふかし男にある打算　花梢
死語となる洋モクの裏の繁栄　祐司
洋モクの紫煙格差を見せた頃　凡九郎
社長のハイライトへ洋モク出しそびれ　一三夫
洋モクも昔ほどには巾利かず　百酒
洋モクの箱からしんせい出してくれ　多久志
洋モクの語韻あの頃あんな事　凡九郎
一箱の洋モク宝のようにした昔　吸江
洋モクの味知る頃の恋に生き　洋敏
洋モクもドルも落ち目と見る時代　百酒
洋モクを使節こわごわ吸うた頃　酔々
洋モクもやみ取引で買わされる　竹荘
洋モクを外貨べらしに吸うてやり　一舟
あちらではニグロも喫うのを嬉しがり　新之助
爪染めた指へ洋モク貰われる　牧人
洋モクをくわえてケチな金使い　花梢
貰いものだからと洋モクあしらわれ　百酒
成金の洋モク趣味を嘲笑い　静香
敗戦の巻煙草洋モクをふと思い　太茂津

兼題「青写真」　小浜牧人選

再起する決意がえがく青写真　軒太楼
青写真それから飲まず喫わず貯め　芳子
それぞれの理想も入れた青写真　一栄
青写真のまま定年へ来てしまい　瓢太
青写真通りにゆかず平で老い　多久志
ファイアンセの知恵もチョッピリ青写真　滋雀
青写真きれいな嘘が有る楕円　栞
ドルショック埃かむった青写真　鬼遊
青写真まだ三歳へピアノ購う　綾女
川柳も入れて老後の青写真　一二三
青写真故郷を遠いものに変え　六龍子
ロッカーの奥に極秘の青写真　一舟
大自然甘う見ていた青写真　維久子
血と汗で描いたわたしの青写真　柳志
青写真白紙に戻す会議室　多久志
専門家にわらわれている青写真　栞
栄転の部長としての青写真　吸江
青写真どうりに誰も乗ってこず　形水
土地売った金のやり場の青写真　いさむ
青写真妻の実家を泣きおとし　静歩
公害の明日は知らぬ青写真　千万子
この辺に芝生がほしい青写真　好一
青写真勉強部屋も隅に出来

一分間の柳論

中川晃男

本格川柳、前衛川柳などと称しても日本語で十七字に書くことには変りない。（多少の余り足らずがあるにしても）違うのは表現法そして対象の感じ方とらえ方である。同じ日本人でも男女、年令、境遇、学歴、職歴それと個性によって異ってくるのは当然であろう。だが川柳として一応の基準はあるにしても「川柳はこういうものだ」と決めてかかるのは危険である。マンネリズムに陥る虞れがある。柳歴の古い人は何を作句しても一応のものができる。けれどレベルを抜出ることはむつかしい。過去の経験や知識に頼って頭で作りあげてしまうけれど、そこには純真な眼がない、驚きがない。邪魔な予備知識、先入感等に囚われず対象をありのままに吸収してしまう敏感で素直な心の眼――。私には真似さえできないがそんな心を持てるように努めたいと思っている。

儲け　てる　頃　には　派手　な　青写真　小松園
書き　替えは　出来ない　人の　青写真　いわを
妻と　子の　意見　も　入れた　青写真　文　秋
青　写　真　へ　遥かに　遠い　預　金　帳　圭井堂
未　来　都　市　空想　めいた　青写真　肖　二
近所　から　苦　情　が　出てる　青写真　葛　城
スモッグも　バラ色に　二人の　青写真　頂留子
青写真　たたけば　汚職の　匂い　がし　いさむ
人参　も　飲んで　頑張　る　青写真　圭井堂
婦唱　夫随　ビジョンの　中の　青写真　文　秋
列島　が　焼き　直　される　青写真　滋　雀
青写真　きれいに　出来て　金が　なし　吸　江
笹舟に　乗って　老　後の　青写真　いわを
平凡な　暮し　に　させた　青写真　維久子
青写真　夢も　予　算　も　ふくれてき　史　好
青写真　たった　一軒　立ち　退かず　天　笑
サラリーの　限度は　越せぬ　青写真　牧　人

兼題「老人」　　傍島静馬　選

老　人　に　されて　健　康　腹　を　立て　正　朗
老人　に　見えぬ　若さを　詩い　あげ　芳　子
ゴミ　処理　費　並みに　老人　対策　費　豪　城
口　だけは　達者　背　や　腰　曲っても　祥　月
御老体　と　言われ　老人　横　を　向き　どんたく
老いぼれの　脇くり親も　借りに来る　誓　二
お祖父ちゃんと言わせず大きいお父さん　誓　二
気だけは　若いが　年は　あら　そえず　好　一
チャップリン七十二歳で子を産ませ　一三夫
老　人　の　日は　極北　の　旅　にあり　肖　二
敬老　の　招　待　蹴って　ゴ　ル　フ　場　形　水
五十年　敷かれっ放しで　老いの　坂　多久志
老人の　たいくつ　夕刊　待ち　わびる　いさむ
定年が　のびて　白髪も　染めて　みる　花　梢
年　嵩　のせい　乾　杯　の　音頭　とる　葵　水
不老長寿　煎じ　薬　を　信じ　きり　多久志

この老人　柔道五段とは　知らなんだ　一三夫
ゴーゴーを　真似て　老人　親しまれ　いさむ
年　老いて　なお　明日　の　虹　温める　小松園
馬鹿に　した　その　老人に　僕もなり　一　舟
老いて　なお　瞼　に　残る　女のいて　弥　生
年寄りに　年寄りと　言い　叱られる　小松園
年金　が　来て　老人　を　意　識　する　圭井堂
年や　おまへん　生きてく　気持　だす　凡九郎
ほの　ぼの　と　老人　ホームで　恋の花　多久志
入歯　モクモク　若かった　事を　言う　あいき
老人の　知恵が　救った　社の　ピンチ　庸　佑
老　人　へ　階　段　ばかり　多　く　なり　鬼　遊
六十　から　もう　老　人　とは　あわれ　あいき
老人と　言われ　度くない　派手　好み　綾　女
文化　勲章　冥土　が　迎え　首へ　かけ　柳　志
もの　忘れ　やっぱり　年や　なと　言われ　儀　一
いたわって　やれば　老人　怒り　出し　一　舟
補　聴　器　で　嫁の　噂　を　ふれ　歩き　柳　志
ある　日　御詠　歌の　会へ　誘いが　来　三十四
若い　気でいるのに　老人　手帳　来る　儀　一
老人　福祉　動物園　が　無　料　でした　柳宏子
老人へ　宣伝　マッチ　もそっぽ　向き　静　馬

兼題「内幕」　　戸田古方　選

内幕　を　ふく　らし　色着け　週刊　誌　どんたく
内　幕　は　裕　福　そ　う　な　松　の　枝　正　朗
内幕　を　知ら　れぬ　だけの　美　しさ　芳　子
内幕を　知らず　きれいな　手で　署名　豪　城
内幕を　かくす　背のびは　もうよしな　一　栄
内　幕　を　知られ　軽く　いな　される　軒太楼
内幕　を　まさ　かと　思う　人の　声　千万子
内幕　を　知って　る　顔　と　目で　笑い　葵　水
いんぎんに内幕ちょぴり触れて去に　吸　江
おしゃべりがすぎて内幕までしゃべり　静　香
内幕　を　話　せる　人で　婿にした　トメ子

内幕へ　しゃべりが　耳を　持って来る　岳　人
内幕　を　知り　空白と　なった　メモ　滋　雀
虚勢　張る　から　内幕　を　覗　かれる　文　秋
やりくりの　内幕　知らぬ　まま　嫁ぎ　緑　水
内幕　を　すっかり　吐いて　よく　眠れ　静　馬
内幕　を　話　せば　女遠　ざ　かり　肖　二
内幕　は　敵　も　苦しい　筈　と　見る　形　水
内幕　を　話　し　頼りに　して　います　いわを
内幕　を　知ってる　幹事だけの　こり　小松園
内幕　を　知って　断り　気を　使い　百　酒
内幕を見せないミンクのコート着る　鬼　遊
自叙伝に　なれば　内幕　美化　される　太茂津
内幕は探ぐられっぱなしで　肥る　野迷路
おかっぱのおませな口がすっぱぬき　柳宏子
内幕　を　知って　も　嫁に　来ると　言い　綾　女
人間　な　んや　どうせと　言う　内幕　凡九郎

第24回　大阪文化祭川柳大会

日時　47年11月19日（日）10時開場・12時半開会

会場　中央公会堂　三階小集会室

司会　西田　柳宏子

開会の辞　菊沢　小松園

講演　「近頃の社会記事から」　俳人　榎本冬一郎氏

兼題　「妻」　貴田　金星選
「日本語」　岡橋　宣介選
「合鍵」　堀口　塊人選
「舌」　西村　芳川選
西尾　栞選
本多　柳志

閉会の辞

席題　当日5題発表（締切正午）

投句　各題2句以内。**出句は出席者に限る**（兼・席題共当日会場で受付）

賞　大阪文化祭川柳賞選者賞

句集　入選句集代二百円当日申込受付。

内幕を 引き 出している 聞き 上手　維久子
おくびにも 出さず内幕 知っており　幸太郎
内幕を 知っても 好きな 人は 好き　重人
盃へ 貧しい 内幕 見す かざれ　六龍子
椅子を 引寄せて 内幕を 話し　牧人
内幕を 話しすぎて 目がさえる　栞
内幕きけば ますます由緒 ある家系　一三夫
内幕はどうであろうとも 肥えてはる　三十四
大金庫 磨いて 内幕 かくした 気　太茂津
内幕を 玉葱の ようにむいて 見る　凡九郎
内幕に階級がある「秘」に「極秘」　古方

兼題「オリンピック」　菊沢小松園選

オリンピック肩のこる日がまた続き　正朗
前畑がんばれオリンピックの限り　芳子
日の丸も オリンピックの 旗となり　藤持
オリンピック放送で残業止めにする　季賛
金メダル 黄色い肌にも よく似合い　一栄
五輪 中継 課長も寝 不足の 一人　豪城
水 泳 の 日 本 世 界 を 驚 か せ　祥月
オリンピック見るだけ得と言うもの　鶴声
五輪 旗は 派手な 踊りで 引継がれ　軒太楼
五輪競技よそにベトナムは血を流す　誓二
ミュンヘンナチスの 臭い消す 苦心　章雅
オリンピック取らぬたぬきの金メダル　鬼遊
戦争 で ない 日の丸 に 涙 する　弥生
ここだけが国境がないオリンピック　庸佑
オリンピック思わく通りにこなメダル　柳宏子
オリンピック参加の意義にテロも来る　一三夫
聖火 燃ゆ 死の 寸前の 顔へ「銅」　太茂津
I・O・C 次元がちがう 血を流し　重人
血の汗もオリンピックは知れており　史好
オリンピックの話題でホステス間もなく　柳志
銃声 の 中に 聖火 は 炎え つづけ　古方
層の厚さがオリンピックを光らせる

オリンピック上には上が有ると知り　綾女
朝六時もうオリンピックを見てる声　茂美
オリンピックの卵も混っているプール　静馬
又遅刻 オリンピック のせいにする　あいき
茲からは 政治 の 外に 立つ 五輪　圭井堂
日の丸の 数へ 秘かに 賭けてみる　滋雀
金 メダル 人間 業 とも 思われず　葛城
金 メダル 苦労 話しを 聞くマイク　三十四
オリンピック 母国の期待 裏切らず　庸佑
日本中 不眠 症 に して 五輪 去る　葵水
テロなどに消すな絶やすな五輪の灯　柳宏子
オリンピック 鳴呼日の丸がいま揚がる　牧人
平和平和オリンピックの灯は消せず　一舟
どの国も かわらぬ 色で 聖火 往く　新之助
ミュンヘンで握ったこの手放すまい　維久子
オリンピック聖火は燃ゆる星あかり　いわを
スタミナを 費い 果した 世界 新　柳志
金 メダル 人種 差別の ない 拍手　花梢
出稼ぎの ようにアメリカ金メダル　小松園

八尾市文化祭第二回川柳大会

時　昭和四十七年十一月十二日（日）
正午開場二時開会締切一時

所　八尾市商工会議所

兼題　幸福・本番・竹・祈り・柴・襟・伝統・挑戦

席題　当日　二題（兼、席題選者交渉中）

投句締切　十月二十日

投句先　八尾市清水町一ノ六
教育センター内公民館
葉書に三句　当日も受付ます

賞　八尾市長賞。議長賞。教育委員会長賞。
外に六点（副賞あり）

主催　八尾市教育委員会
共催　八尾市菜の花句会

一分間の柳論

高杉鬼遊

選者の資格とは何か、現在柳界に於ける資格の第一に経験が上げられるだろう。柳界に入って何年やったからもうそろそろ選者にしてはどうかとなる。

資質は経験だけではない。作句もさることながら自分の好き嫌いを超越した選句の物さしを持たなくてはならない、その物さしは何年も同じものであってはならない。時代の流れに適応した柔軟性とふりはばがなくてはならない。人間の本質は何百何千年経っても同じであっても、風俗、習慣、言葉等変りつつあり、他所の子の成長に驚いて自分の年老いしを忘れる仕儀になってはならない。

現在における大方の作品は、それを作る者と偶々その句を選ぶ者、二者によって活字化され広く知られる事となる。因となる句は勿論、それを選ぶ選者はそれ以上の大切があってしかるべきと思う。佳句を選ぶ選ばないが人気のある選者、人気のない選者となる。

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

八尾菜の花句会　飯田悦郎報

キャラバンへ砂漠ようやく陽は落ちる　肖二
生きる力を見る砂漠　鶴声
落日に影長ながと砂漠の詩　秀信
掌の砂漠と時に語るべし　薫風
虫一つ逃がしたことで子の喧嘩　いわを
虫籠の鈴虫渇いて夏も果て　美代
新婚の浴衣干場で手をつなぎ　悦郎
暮しから抜けて夫婦で出る浴衣　花梢
男滝女滝へ通う虹をかけ　酔々
国境を跨ぐ虹の大アーチ　誓二
大阪と京都を股ぐ虹の橋　静馬
信じ合うふたりに虹が美しい　鬼遊
クーラーがあってビールの味が落ち　河泉
滝壺に来て涼風に髪まかす　綾女
粉のふいた子供を抱いてる夕涼み　雀踊子
汗一杯出して涼しい山男　岳人
団扇から日本をしのぶ夏が来る　弥生
土工部屋に団扇一本残ってた　栞
はずかしい顔は団扇で隠くされる　牧人
団扇持ち昔話の続き聞く　飛鳥

南大阪川柳会　金井文秋報

いじわるな鏡に皺が見えすぎる　滋雀
そうしなはれそうしまひよどちらも素直にて　古方
きっかけを奥歯にかんだまま戻り　莢水
いじわるが下から上るスベリンコ　花梢
いじわるを云い合えるのも恋のうち　好郎
ご好意の酒も車は唾を呑む　喜風
キッカケを作った事を悔いる恋　あいき
末っ子が真ん中春風にわらべ唄　水京
きっかけは底値で買うた株に凝り　柳志
コンパスは我が家も入れた立退き図　一舟
痩せぎすの薄着見るから涼しそう　肖二
風邪ひかぬ妻が自慢の薄着ぐせ　智子
子がせがむまま真ン中に出てしまい　恒明
耳打ちをきっかけに厭な座を逃がれ　誓二
悪童の罠にいじわる引っかかる　形水
郊外が山につかえて詰まりだし　新之助
好意持つ証拠か顔が赤くなり　好一
好意にもすぐ涙ぐむ気の弱り　文秋
とどかない好意はた目の気をもませ　頂留子
おしきせの好意女の弱さ寄りきられ　万里
真ん中が折目の芯になる国旗　金三
きっかけは足踏みつけた靴が知る　綾女
いじわるをしたりされたり見られず　儀一
真ん中は男スクリと立つところ　凡九郎
湯上りの薄着昔の香が残り　市郎
郊外へ出ればまだある青い空　一栄
郊外に住んでマイカー欲しくなり　柳信
ホステスのスケスケルックに骨抜かれ　静馬
大胆細心孫を薄着で嫁育て　章雅
若者にセンターラインないらしい　八郎

むらくも川柳会（島根県）　藤井明朗報

うっかりと素顔を見せてから慌て　白汀
星仰ぐ児の瞳夜空に母を恋う　祥月
星消したネオンの甘き夜に酔う　正朗
明星を仰ぎ出漁の波をける　一郎
辛抱が出来た錦を着て帰る　芳子
木洩日の反射へおける紗の女　秀子
反射鏡鬼面のように立つカーブ　澄水
反射目に映して急に倒れかけ　敏明
反射する光のような返事来る　松月
倖せは親子が素顔に戻るとき　福子
反射鏡正直ものでたよりなし　芳枝
ふた親をうつして育つ反射鏡　一葉
反射にぶくなって老い坂のぼる　明朗

堺・若芽合同川柳会（堺市）　吉岡青香報

梅雨ゆえにタンスの中も調べて見　志寿
梅雨止んで処生訓らしきもの残る　夢成
生死(しょうし)かけた演技で乗切るドルショック　紅月
人生の演技へ幕の予告なし　柳信
三代目血はあらそえぬ芸を見せ　青香
高価品揃えてウインドかんこ鳥　清女
老夫婦揃って歩く懐古録　柳影
皆揃うた夕餉の膳の賑やかさ　誓二
揃い踏み面倒くさい顔もおり　葵水
女連れやっと割勘の気が揃い　好郎
憎いやつほどそばによってくる　備後桜
憎しみが顔へ出ている話しよう　宏子
親同士憎み合って子は無邪気　徳子
憎めない寝顔に解けたわだかまり　一二三
めんないへお手て揃わぬ児もまじり　儀一
憎まれた割に長生きして居らず　笑痴
愛情の憎み明日に背を向ける　千万子
憎からず思えど木枯し紋次郎　小松園
四十九日もう香水が薫るなり　摩天郎
水中花香りを持たぬ色でさき　雀躍子
白菊の香にしずめている疑惑　花梢
すれ違うものみな香りもつ五月　天笑
飛鳥路のみどりに夏の香り吸う　美房
浮き沈み沈みの底で明日を待つ　茂雄
明日のこと思うゆとりのない暮し　維久子

南海電鉄川柳会（大阪市）　辻圭水報

寿号にのる出発は裾模様　摩天郎

出発のバスを待たすトイレ組　誓二
出発へ母の顔ある倖せさ　宏子
出発の変更秘書を慌てさせ　清女
出発をしたら喧嘩をもうはじめ　圭水

川柳ささやま　河原みのる報

石がきの苔に歴史がしがみつき　とおる
何神か苔蒸す石におわすらし　素水
苔ごろも着てニッポンのこころ知る　みのる
ひたすらに苔のむすまで生きたがり　喜美代
道ぶしんそけた苔むす千字塔　近江
面会謝絶ドアーの前でただ祈る　青峰
入口で見舞言葉の仕上げする　百合子
見舞客同士の無沙汰まだ続き　ゆきお
お見舞に来たのにピンポンやってた　越山
満員次第〆切りますが頼みに来　宗
三才は間違いなかった乗りおくれ　猪村
約束をしたかと真顔でとぼけられ　雅佐女

しんみりと約手に見入る十二月　可住
シームレスがずってるママのボーダー　トンボ
ボウリングすれどもやせぬ足をなで　齊子
ストライク銚子十本あけたよう　齊花
ボウリングなどと体よく誘い出し　無鬼
一千万稼ぐボーラーのきゃしゃな腕　無聖

オーエスケー川柳会　大坂形水報

公害の都会のすみにアマリリス　瀬治山
青色に生命あずける交叉点　幸太郎
生活のかかったバット空を切り　川上
プロ並とおだてられ作る棚　丸山
プロ野球スターの動きで銭になり　博泉
どたん場で持ち直してるプロ意識　亜成
プロ意識持てずに毎日送る日か　青谷
色型もマンガの付いたものに敗け　西岡
壁の色変えて見るのも倦怠期　一扇
大阪を離れ緑に生き返る　健坊

雅号ぶっちゃけばなし（103）

浜野　奇童

はまの　きどう

まだ童顔消えやらぬ私を、柳界にひきずりこんだ福島鉄児さんが、本名「基」を音読みにして「奇」を当て命名してくださったのが「奇童」である。奇は、奇人変人につながり、私の性格にずばり、苦笑しながら「まあいいや」と生涯の号としてしまった。

ところが何かの折「奇童＝すぐれて賢い子ども。子どもとは思えないような知恵、才能をあらわす子ども」なる解釈を辞書の中に発見して驚いてしまった。

おそらくその事を知って命名してくださったであろう鉄児さんの期待にもそえぬまま、重たい雅号をかついで柳界をさまよっている。童顔も消え失せて……。

（教員　四十四歳）

一身の都合ポストにほうり込む　有一
抱き上げる子供が入れる吉き便り　神田
さすがプロ巨人戦うならせる　仙夢
返信をうたがいもせず投函す　常夢
真打の夢胸に抱き茶を運ぶ　木石
ちゅうちょせずポストへ入る返事イ　形水
しわがれた声がこけしの彩色と　入仙
その上に人気けわしいプロの道　好郎

川柳ウイロー社（ハワイ）　林蒼蛇楼報

悩むより逢って話せと智恵をかし　三石
悩みになやみ生き甲斐かみしめる　峯円
今日もまた恋のなやみを電話口　美千女
さっぱりと悩みをすてて今日を生き　万里歩
嫁いでも行かでも悩む親心　紅渓
うち明けた悩み明るい朝が来る　雪女
老人の悩みは二と二で割り切れず　拝山
踊らされてるとは知らずまだ踊る　十吉
よろこびと悩みの浮世七十年　蒼蛇楼
さて舞えば古稀とは見えぬ艶やかさ　カロ女
会う眼と眼ツローキッスでまた踊り　快夢起
舞台裏孫の踊へ気がもめる　明女
総踊り間違いもあって面白し　暁舟
何もかも忘れ踊れたらなと思う　エス子
カナカ娘ゆかたを借りて盆踊　河舟
各人種輪になりハワイの盆踊　椰子郎
月冴えて影ふみながら盆踊　公女

川柳東大阪　竹中肖二報

狂人の空想世界は俺のもの　鬼遊
子が育ちママ空想を裏切られ　儀一
空想が一杯並ぶ子供部屋　豊三
ベテランの無事故を誇る日の速度　古梅
ベテランもどうにもならぬこの社運　水京
千代紙のくさりは色で部屋飾り　由起子
物置きにゆがんだままのフラフープ　以兆
優良児ヘルスメータの針躍る　柳宏子

友情に 計り 知れない 借りが 出来 誓 二
さすが 大物 計られた 顔を せず 文 秋
メートルで 計る和裁が じれったい よし子
酒 に 罪着せて 何やら下心 寅 道
宿題を 忘れ お腹が 痛くなり 莢 水
目不足 をいつも 知ってる お 米櫃 喜 正
万全の 計画 立てて 金がなし 牧 人
あきま へんわと 商 人 探り 合う 頂留子
不景気 を 賽 銭 箱 は 聞き 流し 富久一
景気よく 飲んで 割勘 もめている 思 月
不景気を 肌で うけ とる 釜ケ崎 綾 女
税務署へ 景気の 悪い 顔が 寄り 湖 風
良い 景気らしい 感じの 端書来る 悦 郎
景気には 触れず テレビの 花便り 一 栄
景気よく 飲めと 一合 きりの 酒 靖 子
新幹線景気上昇吉備の里 大丘子
景気よい 手土産で 来る給料日 あいき
景気よく 遊び 汚職で 手配され 柳 信
先生の 癖 も 習った 花を 活け 喜 風
先生と 初めて 云われて 尻すぼみ 秀 麿
五年 振り 故郷 の 先生 同じ 服 三十四
郷土史 を 語る 先生 村を 出ず 酔 竜之助
親バカが 先生の 住居 聞いている 志 都
分校の 先生ストーブの 薪も 割る 六龍子
鉢巻の 今日 先生の 顔でない ひろお
楽屋では ドテラ 着ている 大先生 肖 二
退屈な ブン屋 煙草の 輪を ふかす

川柳たけはら　森井菁居報

子も年頃 髪を切ろうか のばそうか 房 子
しっかりと抱いてわが子とたしかめる 法 子
父親の 涙を 知らぬ 角かくし 操 子
死との 対座 無言で 灯を 見つめ 不 動
汽笛 澄み ふるさとの 海 静かなり 康 宏
うっかりと 禁句 心の 傷にふれ そのみ
流れ 来て 流れゆく 水過去がない 雅 鳳

果たされぬ夢をわが子にかけてみる 千百合
けもの 道 花も 嵐も 越えて ゆこ のぼら
団体の 波 に もまれて 京の 春 路 秋
妻 病んで 知る 妻の 座の 重み 文 明
本当の 好意 へ 好きな 色を 選る 英 子
お茶碗の 音へ コロッと 孫が 起き かつ子
身だしなみ とて外出の エチケット 大 陸
ひな 祭り 縁起 直しに 買い揃え 敏 恵
エリートの 下に 敷かれて 生 字引 郷 愁
誕生日 孫らも 知っていて くれた 五 湖
外泊を 看護婦 さんに ひや かされ 南 風
交際 も せずに 断わる とは 無 礼 誠 香
太陽 の 恵み 貧 富 を 区 別 せず 繁 男

川柳大阪　児島与呂志報

東 京 へ 来て 純 情 む しばまれ 三十四
写真機へ ハンカチの 胸ぐっと張り 本蔭棒
七人の 敵へ 意 欲 の 靴 を はく 徹 舟
説教 を 喰い 意 欲 が 遠く 去り 秀 峰
純情 のうなじ 少女 の 澄んだ 色 洛 酔
足 の 爪 女 く る り と 後 向き 一乃字
足音に めだかが 散った 春の 午後 胡 蝶
ハンカチを貸す仲だったとも知らず 笑 風
終電へ 酔った サンダル 高く 駈け 徳 松
爪をかむ 娘よ お前 何が 欲し 敏
足音で 不 満 ぶち まく 反 抗 期 我 勝
権力を 示す お城に 金子 が 要り 蟻香糖
人 災 の 爪 あと 無 残 崖 くずれ まさじ
早春の 足 音 山 道 ふきの とう 戸 無
花売りの 娘 寒 空 街 に 立 ち 天 主
足 音 で 噂 話 の 座 が 白 け 呑歩利
意 欲 もつ 心 が 職 場 明 る くし 二天坊
公 約 へ 意 欲 は ほんの 二 三 日 漁 人
すべからく 女は 金がよくかかり 茂 坊
春斗に 意 欲 を 燃やす 旗 の 波 錦 秋
足音でわかるその日のバロメーター 晃 山

それぞれの 足音 たてて 子が 帰る 誓 二
チビ下駄は 足音 だけが 高く 鳴り 武 松
タイル 跳 る 足 音 高き 朝 の 客 真 実
足音も やっぱり 親子や 似て 嬉し 雅 巣
約束の 日 爪にまで 恋させる 早乙女
特売の 服 まで 値切 る 古 女 房 幽 泉
口説かれた 女将が 男 手玉 とり 太 峰
人見 知りして 抵 抗 し ○ 歳 児 楽 々
青春の 抵抗 素直に 聞けぬ 耳 喜 酔
散って 行く 桜の 心 知 る や 酒 重 人
野 党 席 牛 歩 の 策 で 抵 抗 し 力 泉
公 害 へ 位 牌 を 胸 に 抵 抗 し 東 風
抵抗を やめて 世 間 の 丸く 見え 金 太
陽の 光 こんな 露地まで 春に する 与呂志

城北明朗句会　川口弘生報

いつの間にか テレビ指定席が 出来 満津子
今晩の オカズはテレビ そのまんま 濁 水
よいテレビあるので留守番ひきうけ 弘 生
ご隠居はテレビと炬燵にお守りされ 繁 子
ニクソンも毛さんも茶の間へ笑って来 三十四
害あって益ないテレビにかぶりつき 生 仏
閑居してしょうことなしにテレビ見る 三 平
お婆さん テレビ 智識で 孫に 勝ち シ ゲ
借金は 返えさずテレビ 買い替える 春 巣
着流 しで 万年 床 に 入る 孤 独 隼 人
妥協点 見 出すまでの 脉の 音 太茂津
孫が 来て 老人 扱いして 帰り 進
世話好き爺さん世を去って惜しまれる ますゑ
梅の花 ウグイスの 声 きけずなり 秀 村
感 謝 状 だけで P T A がすみ 小 路

まるべに川柳会　村田瓢太報

恋 ま で に 発 展 したか 見 舞 客 寿 子
一 仕 事 終えて 麦 茶 の 軒 涼し 扇 里
サーカスの 一座が去って もとの村 星 斗
炎え 切れず 温り だけの 恋を 抱き 節 子

お茶ばかりよばれた夜の目が冴える　茂児
恋ごころ反対されてなおつのり　一世
飼主の情け忘れし猫の恋　貞子
里帰り母もだまって茶をすすり　慶子
クーラーよりすだれのゆれる風をほめ　好郎
お抹茶も習っているのにこの行儀　瓢太

駒つなぎ（大阪市）　岸南柳報

四十年静かに頼り合う婦女　良平
サングラスかけて変身したつもり　宏子
老眼鏡かけてまだまだ派手なシャツ　順三
老眼鏡いらぬ首相の世の中に　はやを
名指しすりや変な顔した眼鏡越し　南柳
リズミカルな鋏に客は眠らされ　悟郎
紙細工鋏生きてるように切り　多津緒
花鋏よりもヤットコを好く造花　眉水
処女列車テープを切ったいい鋏　育園
先生の鋏で活きた百合の花　柳信
切れ味の悪い鋏は忘れられ　いわを
危ないと云うて鋏をとり戻し　摩天郎
借りて来たブリキ鋏に勘を立て　小路
型紙へ念を押してる断ち鋏　弥栄子
ブリキ切るはさみに素人みくびられ　儀一
夜ふかしの鋏に明日が来る笑い　岳人
絆切る鋏もすでにさびている　みよ
決心がついて鋏の音確か　小松園

和歌山七面句会　三幸報

黙黙と名人の顔呆けて坐す　光治
湧水のよりそい強い滝となり　政夫
名人となって自由が失われ　凡夫
名人と言われる人も向うむき　蘇風
名人と言う人みんな同じ顔　喜八郎
此の城はアベックだけの登る城　紅梅
灯をつけて女一人の城とする　淳子
限界を越えて名人貧をする　勇次
着流しの日の名人を追うカメラ　不二也
名人の腑曲りまでよろこばれ　文厚
電飾を受けてむなしき城の月　登
チューリップ咲かせ女の城守る　其夕
なにもかも知って名人知らぬ顔　杏林子
養老の滝はネオンの灯にそまり　芳童
掛軸の滝にグングン鯉のぼる　春子
インタービューする名人の国訛り　富子
午後三時現場は城の影を得て　幸雄
滝にあるいのちの音をじっと聞く　太茂津
悲話だけが遺る城趾に丸い月　葵水
口論のあとしばらくはお城見る　三幸

丸文川柳会（倉敷市）　竹内翁童報

夏の海吾子を見守る若い母　良音文
冷房に海へも行かぬ夏休み　玉仙
公害でどこにいったか青い海　真佐
海鳴りへ漁師のさけぶ胴間声　翁童
今はなし海埋めたてた工場地　俊寿
鳴る海に安否気づかう漁夫の家　和夫
見せるだけ海辺のビキニぬれていず　頑念
公害に追われて魚の住宅難　尚子
ボート展海のレジャーの夢を追い　健山

川柳わかやま　垂井葵水報

酒運転死角のせいと逮捕され　直吉
観光に大きい役を果す城　栄
喰べる間は出番待ってるコンパクト　千枝子
旅鞄コンパクトサイズの本を入れ　春亭
卒業の七日前からコンパクト　暢
一城の主のみ屋の馬も付け　亀川
科学者も結構神仏をも祈り　四四坊
公害に死角もほしい国となり　延知知
屋台そばここも一つの城守る　義広

（以下次号）

▼長い句は短いのと入れかえてください。なるべく十六字以内にお願いします。—編集部

岸和田市制施行五十周年記念
文化祭参加

第23回市民川柳大会

日時　昭和四十七年十月二十二日（日）午後一時～五時
会場　岸和田市民会館地下ホール
挨拶　岸和田川柳会　高橋　操子
来賓挨拶　岸和田市教育委員会
〃　岸和田市文化協会　中島生々庵
柳話　川柳塔社主幹　植山武助選
兼題　「傷」「三角」「溢れる」　上林加仙選　青木三碧選
「子供」「心」「地図」「五十」　川村好郎選　榎本聡夢選　岡橋宜介選　高検操子選
席題　当日三題発表（各題三句宛）
呈賞　市長賞、議長賞、教育委員会賞　文化協会賞、きしせん賞、各題秀句賞
締切　二時三十分
投句充　岸和田市宮本町二四ノ二　吉村たけし宛
（投句のみの方）
TEL岸貝局〇七二四㉒七六〇四
主催　岸和田川柳会
後援　岸和田市教育委員会　岸和田市文化協会

10月の会場略図

（ご案内はP39）

・募　集・

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞　選

近作柳樽（10句）菊沢小松園　選

課題吟（各題5句以内）

「餅　花」竹中肖二　選

「浴　客」野村岬月　選

「腕つ節」林　葵丘　選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

新年号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾　栞　選

近作柳樽（10句）菊沢小松園　選

課題吟（各題5句以内）

「初　荷」天正千梢　選

「国　旗」吉岡美房　選

「新　調」福島鉄児　選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳筥をご使用ください。

11月兼題・勲章・稼ぐ・夜長・トラブル

定価　百八十円（送料十六円）

半年分　千百七十円（送料共）

一年分　二千二百円（送料共）

昭和四十七年九月二十五日印刷

昭和四十七年十月一日発行

編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎

印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　大陽印刷株式会社

郵便番号　五四二

発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八五番

振替口座　大阪・三三三六八番

西尾　栞著

句集「水鶏笛」

送料共　650円

・ペンペン草・

★47年度の二賞がきまった。藤井明朗氏の指導よろしきを得て〝むらくも〟の島根組が二賞を独占した。おめでとう。

★昨年あたりから川柳塔社でも難解句が問題になっている。辞書を二冊ぐらい用意しないと読めない句を、新しいと思っている人もいるが、カッコーいいとおもうのだろうか。

★ことしの三月号から〝一分間の柳論〟をのせているが、ここでも難解句の評判がわるい。目ごろの句を拝見して、この人は賛成派かもしれないとおもいご登場ねがうけど、やっぱり敬遠派だ。ぼく自身ホームドラマはきらいだが、一行の句に十行もの注釈づきでないとわからないではついていけない。時間のゆるせるかぎり「なにくそ、これしきの……」と取っ組むものの、結果はお手上げになるのが多い。しかし句者と選者が一致するのだからこちらの勉強不足ということになるかナ。

★―君見たまへ蔷薇草が伸びてゐる―路郎。（原句のまま）この句は故路郎先生の鳴尾時代の作品である。（川柳雑誌大正十三年十二月十五日発行〝第二巻第十一号〟の巻頭八句のうちの最後の句）

★当時新しい句として評判になったそうなので、先生にそのポイントになるところをうかがったことがある。一度書いたことがあるのでクドクドとはのべないが、鳴尾の土はとくに黒く、そのなかからホーレン草の青い芽が人知れず伸びそこに鮮烈な何ものかが詩人の足をとめたのである。

★路郎、霞乃先生の愛嬢梨里さんは「わたしはこの句をあまり買わない」と云われた。ホーレン草が動くのか、それとも注釈づきでないと共感をよばないと思われたのか、そこまではおたずねしなかったが、東野大八先生はこの句をベタほめにされたように記憶する。

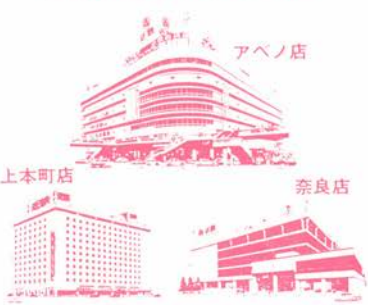
★このホーレン草の句を、大正十三年ごろ〝川柳塔〟か〝近作柳樽〟に、一読者が投稿した場合、果たして先生は入選させたかどうか―よし活字になっても、あの名声をかち得たかどうか。ということになると選者たるものの責任は大きい。

★好きな句をとらずによい句をとれと教えられてきたが、結果的にはだれもが好きな句をとるのではないだろうか。ぼくはそれでいいとおもう。本年度直木賞の選考委員、川口松太郎氏は、その選評で〝次ぎに好きなのは……〟と書いている。だから、二賞の各選考委員諸氏が、他の委員の〝推薦句〟を中間発表にすら拾わなかっても〝好きでなかった〟のだから、それはそれでいいのではないか。

★かって〝同舟近詠〟の人の作品が、まちがって〝近作柳樽〟へいって一しまった。五句入選した。それを路郎先生が再選され、没になった五句が入選して句が入れかわった。語字になってから句を見ると、その作家の個性が句にあふれていた。（前号、独特が独得になったり、横になった字を直してなかった、読めたらいいではこまる）

（不二田一三夫）

疲労回復・肩こり・神経痛に
アリナミンA
タケダ

明日のくらしの
コンサルタント


近鉄
TELアベノ店621-1231・上本町店779-1231・奈良店33-1111

葉子コーナー

▼結婚に適齢期がないように旅行にもシーズンがなく、私もよく連れていただいています。

▼いつも女同士で寝ますが、皆さんの寝はミニです。やはり女性ですね。

▼不二田様の寝はキングサイズです。わずかの時間にぐっすり眠る男性型ですか―これは内緒。

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年九月二十五日 印刷
昭和四十七年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五四五号

川柳塔 十月号

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は　日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む　有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄

えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、四一〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

定価 百八十円（送料十六円）